

第 27 回

ふるさと・

おおふなと

お話大賞

作品集

大船渡市立中央公民館



## はじめに

「ふるさと・おおふなとお話大賞」は今年で二十七回目を迎えます。今回は、三年ぶりに高校生から作品が寄せられ、小学生低学年から一般まで全ての部門にご応募いただきました。また、内容を見ても、身の回りの出来事を優しく描いた作品から私たちのあり方に鋭いまなざしを向ける作品まで、作者の思いが込められた力作が揃っています。

作品を仕上げるまでには、多くの時間と熱意が必要であつたことでしよう。作者の皆様の並々ならぬご努力により、この素晴らしい作品集を刊行できることに心から感謝申し上げます。

この作品集を手にした皆様には、ぜひ、それぞれの作品に込められた作者の意図を読み解きながら、郷土の将来を考える一助としていただければ幸いです。

この作品集を通じ、作者と読者の夢や想いが、ふるさとおおふなとの明日へとつながることを期待しています。結びに、この作品集の発刊にあたり、ご指導とご協力をいただきました小・中学校及び高等学校をはじめとする関係者の皆様、そして審査委員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

大船渡市教育委員会教育長 小 松 伸 也

## 講 評

ふるさと・おおふなとお話大賞審査委員長

石 山 宣 昭

二十七回目を迎える本大賞に、今年は個性溢れる二十六作品の応募があったことを中央公民館の方からお聞きし、大変嬉しく思いました。昨年よりは十二作品少なくなりましたが、今年は三年ぶりに高校生から作品が寄せられたとのことでした。

故郷を舞台にした作品づくりに挑戦された二十六人の皆さん、皆さんの創作意欲に心から拍手を送りたいと思います。

最初に、今年度の作品で特徴的だと思われたことを紹介します。

### ◇小学生低学年部門

- ・日常生活で目にする身近な素材が、作品の舞台になっていること
- ・出来事が第三者の視点になって書かれていること
- ・作品全体から書き手の優しい思いや考えが伝わってくる

### ◇小学生高学年部門

- ・人物や出来事といった作品構成に工夫がみられること
- ・中心人物の気持ちや場面の状況が詳しく書かれていること
- ・会話を多く用い、話し手の気持ちになって書いていること

### ◇中学生部門

- ・身近にある題材から話の構成や展開を考えていること
- ・時刻や場面を変化させることで、物語の山場を作り上げていること
- ・主題をどの場面に設定するかという構想が練られていること

### ◇高校生部門

- ・一人称から三人称まで多様な視点で書かれていること
- ・書き手の伝えたい思い(主題)が強く伝わってくる
- ・場面の中に情景や心情の描写が的確に取り入れられていること

次に審査のことです。私たち審査委員四名は、応募された皆さんの作品を一つ一つ丁寧に読むことで、皆さんの作品と向き合ってきたつもりです。また審査の際には、以下の四つの観点で審査しました。

- ①テーマが独創的で発想が豊かであるか。
- ②時・場所・人物といった構成に工夫があるか。
- ③読み手に分かりやすく、しかも場面の様子が目に浮かぶように書かれているか。
- ④故郷に対する理解や愛情が感じられる作品であるか。

今回応募されたどの作品も故郷を題材にしており、豊かな想像力と見事な構想力で書き上げられた作品ばかりだったと思います。審査の結果、次の六作品が入賞になりました。入賞された六名の皆さん、大変おめでとうございます。

#### ☆大賞

##### 「夏の鈴」

◇越喜来小学校六年 神津 心さん  
震災による愛犬との悲しい別れ。その後、時間が過ぎ、「生まれ変わり」という現象によって主人公と再

会するという話です。書き手である「私」の正体は、後半になって明らかにするという感動的な展開になっています。また「僕」という第一人称で書くことで、作品に現実味をもたらせています。

書き出しが「声」で始まり、結末が「声」で終わる構成も、考え抜かれたものだと思います。文中の「虹」・「青空」「光」など視角的な単語を用いることで、作品に彩りと透明感が加わり、美しい情景が目に浮かぶ作品になっています。

#### ☆奨励賞・小学生低学年部門

##### 「海のお友だち」

◇越喜来小学校三年 佐藤 渚子さん  
海という身近な舞台を中心にして展開する話です。人物（魚介類）がたくさん登場します。魚介類について、一生懸命に調べた成果だと思えます。どの人物も生き生きと描かれていることに驚きます。主人公と海の生き物との交流が細やかに描かれているので、読む人の心を温かくします。会話文が文章にリズムを与え、作品の持つ優しさや幻想的な世界をいっそう、鮮やかにしています。

☆奨励賞・小学生高学年部門

「大船渡が教えてくれたこと」

◇日頃市小学校六年 新沼 遼佳さん

地元の洞窟という素材をうまく用い、話を展開させています。タイムスリップという手法で、気仙の歴史的な財産（「金」と「ワカメ」）に焦点を当てるという工夫した構成になっています。また山場を二つ（金・ワカメ）にしたシナリオも見事です。「ドボン」「ピカッ」という擬態語が場面の印象を鮮やかにしています。先人への敬意と感謝の思いがひしひしと伝わってくる作品です。

☆奨励賞・中学生部門

「海は心の家」

◇綾里中学校一年 舘脇 実優さん

主人公の名前「うみ」と作品の舞台「海」という組み合わせが、最後には父親の娘に対する願いに繋がっていくという構成に驚かされます。親子の感情のすれ違いが伏線として配置され、後の不漁問題と交差させるという組み立てから、書き手としての力量を感じます。「背中が震える」、「ぎゅっと力を込める」など、登場人物の喜怒哀楽の様子も丁寧に描かれている作品です。

☆奨励賞・高校生部門

「木霊」

◇大船渡高校二年 荒木 顕仁さん

「一本松」という遺産を擬人化させ、感情移入する形で書かれた作品です。一本松の「心の痛み」と「存在意義」という内面に思いを巡らせる深い思考の跡が感じられます。読み終わって、これは私たちに投げかけられた警鐘なのでは……と考えさせられました。時系列に書かれているので、分かりやすい展開になっています。「復興」を願う作者の思いの強さが伝わってきます。

☆奨励賞・一般部門

「椿のおまじない」

◇紺野 清美さん

何気ない日常生活の様子をそのまま切り取ったように感じる作品です。親子の会話が軸になって展開するので、自然に作品に引き込まれます。作者独特の文体と言えるのかも知れません。「状況設定・発端・展開・山場・結末」と言う物語の構成がしっかりしているもので、安心して読めます。家庭に伝わる「言い伝え」をさりげなく取り上げたことも作品に奥行きを与えています。

来年度も題名や構成に工夫を凝らした作品づくりに、多くの皆さんが取り組まれることを心から願っています。今後、作品の質をより高めたければ、「オノマトペ」の技法を活用することも一つの手だと思っています。「オノマトペ」とは擬態語・擬声語などと呼ばれるものです。「オノマトペ」を用いることで、物の動きや様子、さらには人物の気持ちや感情の変化がより分かりやすくなるからです。また文章にリズムも生まれるからです。

一つの作品を書き上げるためには、多くの時間と労力が必要になります。適切な言葉や文をひねり出す産みの苦しみが伴うからです。しかし、出来上がった作品には、苦しんだ分だけ、作者の強い思いが反映されます。読者に感動やメッセージを与える作品、それは読者に明るい未来や強い希望を与えます。「故郷」を見直すきっかけとなるたぐさんの作品と、来年も出会えることを楽しみにしています。

# 目次

発刊の言葉

大船渡市教育委員会教育長

小松伸也

講評

ふるさと・おおふなとお話大賞審査委員長

石山宣昭

## ○大賞

夏の鈴

越喜来小学校 六年 神津心……1

## ○奨励賞

【小学生低学年部門】

海のお友だち

越喜来小学校 三年 佐藤渚子……3

【小学生高学年部門】

大船渡が教えてくれたこと

日頃市小学校 六年 新沼遼佳……7

【中学生部門】

海は心の家

綾里中学校 一年 舘脇実憂……10

【高校生部門】

木霊

大船渡高校 二年 荒木顕仁……14

【一般部門】

椿のおまじない

紺野清美……19

☆ 作 品 集 ☆

《小学生低学年部門》

ゆうと金のつぶ

スネカのもくじいのくふう大作せん

海のかみさま

けしゴムくんとスネカ

金色のたんぽぽとしろちゃん

ゆきちゃん、スネカにつれていかれる

まほうの石

やさい大すき

《小学生高学年部門》

あんなとジョンの思い出

にじ色の椿

大船渡っていいところ

春をとりもどしに

|        |    |         |    |
|--------|----|---------|----|
| 吉浜小学校  | 二年 | 木村有佑……  | 23 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 庄司直翔……  | 24 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 佐藤晃善……  | 25 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 小松颯太……  | 26 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 中井よし華…… | 27 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 浅沼凜花……  | 28 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 菊地桃子……  | 29 |
| 吉浜小学校  | 二年 | 八巻心美……  | 31 |
| 越喜来小学校 | 五年 | 及川夢萌……  | 31 |
| 越喜来小学校 | 五年 | 村上優……   | 34 |
| 越喜来小学校 | 五年 | 畑野寧音……  | 36 |
| 越喜来小学校 | 六年 | 大久保心晴…… | 40 |





《中学生部門》

大船渡に迷いこんだ少年

石田三朗と五朗

《高校生部門》

偽りの言葉

雄大と天狗の子

《一般部門》

アワビのしあわせ

なぞのかまもちばあさん

くやしなききねん日

サンマの月見

日頃市中学校 一年 佐藤 優月…… 44

吉浜中学校 一年 高橋 真実…… 47

大船渡高校 一年 菅野 美月…… 52

大船渡高校 三年 出羽 海春…… 57

小松 則也…… 62

木川田 恵理子…… 66

川端 美智…… 69

木下 淳…… 72





## 夏の鈴

越喜来小学校六年 神津 心

声が聞こえる。なんだか懐かしい心地よい声だ。にぎやかなせみの声にかき消されそうになりながら、でも、心のずーっと奥の方にかすかに残る不思議な声。

僕は森の精だ。三年前にふっと越喜来に現れたんだ。

その前のことは思い出そうとしても思い出せない。僕の姿は人間達には見えないけど、いろいろなものに宿って自然と人間の橋渡しをする。雲のない青空なのに急に雨がふったり、誰もいないのにどこからか音が聞こえたり、この世の説明のつかない不思議な出来事は僕のしわざだったりする。僕のいたずらにいつもおどろいたり喜んだりする子ども達を見るのが、僕の一番の楽しみなんだ。

また暑い夏が来た。僕は浪板海岸の海開きではしゃぐ子ども達を遠くからながめていた。

ふと誰かの視線を感じてふり向いた。するとそこには一人の女の子がじっとこちらを見て立っていた。僕はどきっとした。僕の姿は人間には見えないはずだ。

もちろん今まで誰にも気づかれたことはない。僕の足元に転がっているボールを取りに来たみたいだけど、ずっと僕から目をそらさない。何でこっちを見ているんだ。もしかして僕が見えるの。どうしようという戸惑いの気持ちで僕は女の子を見ていた。すると女の子は、

「誰かそこにいるの。」

と小さな声でいった。僕はどうしていいか分からなかった。だって、僕の声はどうしたって女の子にはとどかないはずなんだ。ただ、大きな戸惑いの中で、僕の心には嬉しいという気持ちもあった。今まで僕は一人でさみしかった。本当は楽しそうに遊ぶ子ども達と一緒に遊びたかった。僕に気づいてほしかった。だから僕が存在に気づいてくれた事に応えたかった。僕は思い切って

「遊ぼう。」

と大きな声で言った。もちろん声は届くはずはない。そこで僕は女の子の足元にあった小さな赤い花のつぼみをぱっと開かせた。女の子はその花をじっと見つめて、

「ありがとう。」

と言って帰っていった。

その日から毎日その場所に女の子はやって来た。そ

の子の名前は夏。越喜来小学校の六年生で、海が大好きな明るい女の子。自分の話を一生懸命してくれる。時々お母さんとけんかしたとか、友達に意地悪されたとか、泣きそうになって話すこともあった。今日はテストが百点だったと嬉しそうに話してくれた。夏ちゃんが嬉しそうな顔をする。僕まで嬉しくなるんだ。

夏ちゃんの誕生日には僕なりのプレゼントをした。その日は晴天だったから、ちよつとだけ雨を降らせて、大きな虹をつくってあげたんだ。その時の夏ちゃんの笑顔、きらきらしてまぶしかった。

そんなある日、夏ちゃんは突然こなくなった。毎日毎日待ち続けたけど、やっぱり夏ちゃんは来なかった。

僕はさみしかった。楽しかった日々が当たり前になっただけで、また一人になった自分を受け入れられなかったから。寒い冬が過ぎて、春が来ても僕はまだ一人ぼっちだった。僕が笑わなくなってから、どれくらいたっただろう。また、暑い夏がやってきた。

突然夏ちゃんは僕の前に姿を現した。

「ごめんね。急にさよならも言わずにいなくなっちゃった。と彼女は言った。髪が伸びて少し大人っぽくなっている。夏ちゃんは静かに、そして、少しずつ話し始めた。お父さんの仕事の都合で遠くの街に引っ越したこと。今日は夏休みでおばあちゃんの家に泊まりに来たこと。

新しい学校での話。今までのことを沢山話すと、夏ちゃんは黙りこんでしまった。悲しい顔をした夏ちゃん。はゆつくりと、また話し出した。

「私が小学校三年生の時、震災があつて、大事な家族をなくしてしまったの。それはね六歳の時から一緒だったゴールデンレトリバーのサマー。」

そのとき僕は全身がしびれるような不思議な感覚に包まれた。そして、なんだか懐かしい記憶がぼんやりとよみがえってきた。彼女は続けた。

「サマーは震災で行方不明になってまだ見つかってないの。何年も探して、あの夏のあの日、この場所で見つけたの。それを。」

と僕の方を指さした。その先を見てみると大きく分かれた枝の先にキラリと光るものがあった。よく見るとさびた鈴が不思議なことに幹に食い込んで枝の一部になっている。

「それは私がおこづかいで買ってあげたものでサマーの首輪にずっと付けていた物なの。やっと見つけた。サマーにやっと会えたの。」

そう言って彼女は大粒の涙を流した。

「私には見えるのよ。」

そう言うとき彼女はそつと僕に触れた。すると僕の心の奥にあった小さな記憶が一気に解放された。僕は思い

出した。楽しかった記憶があふれるようによみがえってくる。そうだ。この名前は夏ちゃんが、「私と同じ名前にしようね。」と言って英語でサマーってつけてくれたんだ。優しかった夏ちゃん。いっぱい遊んでくれた夏ちゃん。僕は夏ちゃんが大好きだった。

そのとき、幹に食い込んでいた鈴がポトリと落ちた。夏ちゃんはその鈴を拾うと、涙で顔をくしゃくしゃにして、

「お帰り。」

と言った。すると、まぶしい光が僕を包み、僕の姿は光の一部となった。

僕はきつと夏ちゃんと、お別れすることを受け入れられなくて、この世にとどまっていたんだ。そう、この声。なんとなく忘れられない声に引き寄せられて、僕はここへ来た。そんな僕を夏ちゃんは見つけてくれた。これでやつときちんとさよならできるんだ。

夏ちゃんが、

「またきつと会おうね。」

と、さびた鈴を両手で強くにぎりしめて言った。

どこかで聞いた事がある。大切にされた命は、またよみがえる事ができるって。いわゆる『生まれ変わり』だ。愛されて一生を終えたと、また姿を変えてその場所へ帰ることができるんだって。「また、夏ちゃんに

会いたい」そう強く願って、僕は幸せな記憶とともに消えていった。

声が聞こえる。

僕を呼ぶ声。

なんだか懐かしい心地良い声だ。

僕はゆっくりと起き上がると、その優しい声のする方へ走り出した。チリンと首元から音が鳴った。鈴の後ろに summer の文字がきらきら光っていた。



### 【小学生低学年部門】

海のお友だち

越喜来小学校三年 佐藤 渚子

ここは海のすぐ近くにある「サンリク」という国です。この国は、たくさんの人がなかよくくらす、へいわな国です。そこに、ティティというおひめ様が住んでいました。ティティは九才のとてもやさしいおひめ様で、サンリクの海が大スキでした。そして、いつもまほうのティアラをつけています。そのティアラをつ

けると、生き物としゃべることができるようなんです。ティティはそのまほうを使って、いつもたくさん生き物と話をしながら楽しんでいました。

今日はティティたちの国の海の日です。サンリク海では海の日になると、魚がたくさん出てきます。生き物が大好きなティティはとても楽しみにしていました。

ティティと家族は、おしろがたの船で海に行きました。お母さんは海を見ながら、

「海には人魚がいるんだよ。」

と教えてくれました。ティティは、

「本当かな？」

と思いました。ティティは、人魚のことを本で読んで知っていましたが、会ったことはなかったもので、海をしばらくながめてみることにしました。

しばらくすると、大きいヒレがちらりと見えました。

そのしゅん間、まほうのティアラがむらさき色に光りました。すると、みるみるうちにティティにヒレが生えてきて、「人魚のティティ」になりました。

「本物の人魚に会って、お友だちになりたいな。」

そう思ったティティは、家族にはないしよで、急いで海に泳ぎに行くことにしました。

少し泳ぐと、目の前に本物の人魚があらわれました。

「まって。」

とティティが言うと、人魚は急に止まり、ふり返りました。ティティは言いました。

「わたしはティティだよ。あなたは？」

人魚はこわがった様子で、

「わたしはララだよ。」

と言いました。

それから二人はいろいろ話しました。でも、二人がいちばんおどろいたのは、二人ともまほうを使えることでした。ティティは生き物としゃべれるまほう。ララは人間になれるまほう。そんな話をしているうちに、二人はすっかりなかよし気分になりました。

いきなりララが思いつきました。

「そうだ。わたしの家族をしようかいするよ。わたしについてきて。」

そういうと、二人はにつこりしました。

「わたしたちの家は、わかめの森林をこえた先の方だよ。」

「へえー。わかめの森林があるんだ。」

そんなことを言っている間に、ララの家に着きました。

「プラネツチ！」

「プラネツチってだれ？」

「わあ！」

いきなりララのかっこしているかめのプラネッチが出てきました。ララが言いました。

「実は、わたしはまほうを使わなくても、生き物と話せるんだ。プラネッチはオスなんだけど、人間でいうと九十八才なんだ。でも、この辺のかめは千才くらいまで生きるから、小さいほうなんだよ。」

「えっ！びっくり！」

「そして、わたしのお母さんとお父さんは、この海の王女と王様なんだ。」

「またまたびっくり！」

「わたしのお父さんは、サケの人魚で名前はモーサン。お母さんは、マンボウの人魚で名前はロビンっていうの。」

「わたしの家族はとてなかがよくて、深海にピクニックに行ったり、イルカがやっているレストランによく行くんだ。」

それを聞いてティティは、とてもうらやましく思いました。

その後、二人は家のまわりで遊びました。イトマキヒトデでオセロをして、ダイオウイカの足でなわとびをして、ミンククジラのせなかに乗ってふん水のウォータースライダーをしました。と中で二人はおなかへって、クラゲゼリーを食べました。

「次は何して遊ぶ？」

とティティがララに聞きました。

「ホタテの中にあるしんじゅをさがしに行こう！」

二人はむちゅうになつて、しんじゅをさがしました。

気づくと、あたりは暗くなつてきていて、夕方になつていました。

「そろそろ家族が心配するから帰らないと。じゃあ、また遊ぼうね！ララ。」

と言って、ティティはまほうのティアラを使つて人間にもどろうとしました。しかし、ティアラがありませんでした。

「どこどこ？わたしのティアラ？頭にあつたはずなのに。ティアラがないと人間にもどれない。どうしよう。」

とティティはこまってしまいました。

「わたしも手伝うから、いっしょにさがそう。」

とララは言いました。二人はティアラをさがしに行きました。

「ねえ？ダイオウイカさん。わたしのティアラを知らない？見なかった？」

「ぼくの足でなわとびしたときは頭にあつたよ。」

「ねえ？ミンククジラさん。わたしのティアラを知らない？見なかった？」

「ぼくのせ中にいるときは、あつたよ。」

気づくともう夜になっていました。暗くて何も見えなくなっていました。そこに、ちようどよくチョウチンアンコウさんがおさんぽをしていました。ティティとララは、わけを話して手伝ってもらうことにしました。

「ねえ。チョウチンアンコウさん。あなたのちようちんでてらしてくれる？」

「いいよ。手伝ってあげるよ。どこをてらせばいい？他にどこで遊んだの？」

「しんじゅをさがしに、コイシハマの海に行ったんだよ。」

三人はコイシハマに行きました。とちゅう、海はまっ暗できけんな生物が出ないか心配でした。でも、チョウチンアンコウさんのおかげで、ぶじにコイシハマに着きました。

二人はティアラをさがしました。通りがかりのドンコのおじいさんに聞きました。

「ねえ？ドンコのおじいさん。この辺りでティアラを見ませんでしたか。」

「むこうのでっかいホタテが貝がらとじないとこまっていたよ。」

二人は、ドンコさんに教えてもらったでっかいホタテの所に行ってみました。すると、でっかいホタテは

ドンコさんの言う通り、ティアラがはさまって貝がとじなくなっていました。

「あつ！ティアラだ！」

「プランクトンを食べていたら、人間がすてたゴミが流れてきて、それまで食べてしまったんだ。」

と、でっかいホタテはこまった様子で話しました。

二人は、力いっぱいティアラをひっぱってみましたが、はさまってしまつてぬけません。そこで、みんなに手伝ってもらうことにしました。ダイオウイカやミズダコのきゆうばんでひっぱってもらいました。

「いっせえので！」

すっぽーん！

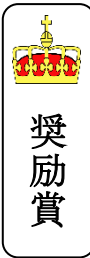
「やったあー！ぬけたー！」

「これで人間にもどれる！みんな、ありがとう。」

まわりを見わたすと、ゴミがいっぱいしずんでいました。あきかんやビニールぶくろなど、人間がすてたゴミがいっぱいありました。

「人間がひどいことをしてごめんね。これからは、海をよごさないようにみんなできれいにするように気をつけるよ。」

「ララ。わたしそろそろ人間にもどって、家族のところに帰るね。今日は楽しかったよ。サンリクの海にこんなに魚がいると思わなかったよ。」



「ティティまた遊ぼうね。こんどはまほうで人間になつて遊びに行くね。夏虫山のおふろに入ることがゆめなんだ。つばきクレープも食べてみたいな。」  
その夜、二人はぐっすりねむりました。

## 【小学生高学年部門】

大船渡が教えてくれたこと

日頃市小学校六年 新沼 遼佳

「ねえ、こわいよコウタ。もうもどろうよ。」  
「大丈夫だよ。ほらもう少しおくまで行ってみようよ。」  
ぼくの名前はダイキ。今日は、親友のコウタと一緒に、日頃市の関谷洞くつに自由研究のために来ている。関谷洞くつっていうのは、ぼくが通う日頃市小学校の近くにある遺跡で、学級の人々と地域探検の時に行ったことがある場所なんだ。その時は、入り口までしか行つたことがなかったけど、今日は、自由研究ということで中まで入って来ている。そこまでは、よかったんだけど、暗いし、寒いし、一刻も早く出たい。けれど、コウタはどんどん進んでいく。こんなに進んで

しまつたら、もう戻れないじゃないか。

「ねえ、そろそろ本当にもどろうよ。」

「なんでだよ。せっかくここまで来たのに……って、ん？」

コウタが驚いた顔をした。

「どうしたの？コウタ。」

ぼくは心配になつてコウタの目線の先を見てみた。すると、なんとということだろう。目の前に湖が広がっていた。

「うわあ、すごい。」

ぼくは思わず声をあげた。こんなところに湖があるなんて知らなかった。

「ちよつとさわってみようよ。」

「うん。」

二人でゆっくり湖に近づく。なんてきれいな湖だろう。その時だった。

「わっ！」

ドボン。気がつくと湖の中に入っていた。顔を出そうとするけれど、足がつかなくておぼれそうになる。

「ダイキ、大丈夫か。今助ける。」

コウタの声が聞こえる。コウタの手が見える。ぼくはもがきながらコウタの手をにぎり、起き上がろうとしたそのとき、コウタも湖の中に落ちてきたのが見えた。ぼくに引きずりこまれたんだ。足が何かにすいこまれ



ていく気がした。息が苦しくなってきた、思わず目をつぶる。

どのくらいたったのだろう。はっとして目をあけるとなりを見るとコウタがいた。

「ここはどこだろう。」

周りを見渡すと、見たことがあるような、ないような：なんかつかしい感じの風景が広がっていた。そして、周りを見渡すと、汗だくになっている男の人たちが、木のような古い道具を使って土をほっていた。何をしているのだろう。不思議に思い、しばらく見ていると、突然

「おおー。」

と、男の人たちが声をあげた。そこには、キラツと光るものが見えた。すると後ろから声がした。

「おめえだち、なにしてるんだ。」

ぼくたちへかけられた声にびっくりし、声も上げられない。すると、男の人が続けた。いった。

「ここは、今出山金山だ。わらしつこが来るようなどこではねえ。あぶねえがら、どつとと帰れ。」

なんだって、今出山金山？

「ここは何をしているんですか？」

コウタが聞いた。

「ここで、金をほっているんだ。この金を平泉に送

るんだ。これはあぶねえ仕事だけんと、でほでえ金になるんだ。」

「ええーっ。」

ぼくたちはびっくりして大きな声をあげてしまった。

今出山で金が採れるなんて知らなかった。でも、平泉に金を送るって言ったような：

「平泉に金を送るって言ってたけど、何かあったんですか？」

すると男の人はびっくりしたように言った。

「ばあ、おめえだち、知らねえのが？今、平泉に中尊寺という寺を建てているんだけんと、そごさ金色堂っていう極楽浄土を再現した建物も造ってるんだ。藤原清衡さまの命令だけんと、今出山の金が使われるなんて、すんげえ名誉なごった。」

藤原清衡？中尊寺を建てる？

「藤原清衡って生きているんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「あたりまえだべ。中尊寺がでぎたら、おれも見に行きでえもんだあ。」

ぼくたちは、びっくりしすぎて声も出なかった。ということは、今は平安時代だ。じゃあぼくたちって、タイムスリップしたってこと？信じられない事実、これからどうしようと思っていたとき、いきなりピカ

ツとまぶしい光が目差しこんできた。ぼくは思わず目をつぶる。何も聞こえない。

しずかに目をあけると、今度は一面に海が広がっていた。気づくとぼくたちが立っていたのは砂浜だった。

「どうしてここにいるんだろう。」

コウタに聞いてみる。

「さあ、また、タイムスリップしたのかな。あれ？海に何かがある。」

コウタに言われて、ようやく目をこらすと、海に小さな船が見えた。その船には人が乗っていて、だんだんこっちに近づいてくる。

「おうい、お前たち、見慣れない顔だな。どこから来たんだ？」

船に乗っていた男の人が、ぼくたちに話しかけてきた。

「ええと…。ちょっと遠いところからです。」

何とも答えられずに言葉をにごす。まさか、未来から来ましたなんて言っても信じてくれないだろう。

「それより、何をしているんですか。」

男の人に聞いてみる。

「ああ、おれかい、おれは、日本で初めてのわかめの養殖に挑戦しているんだよ。」

「日本で初めて？」

ぼくたちは、びっくりして聞き返した。

「でも、失敗が多くて、なかなかうまくいかないんだよ。」

「だったら、天然わかめをとった方がいいんじゃないですか。」

疑問を口にしてみる。

「でも、天然わかめは、採れたり採れなかったりして、不安定だし、村の漁師の生活をよくするためにがんばりたいんだ。必ず成功させてやる。」

おじさんが語った大きな夢と仕事に対する一生懸命さを聞いたぼくたちは、新しいものを生みだすことの大変さを感じとった気がした。

「きつとおじさんの養殖は成功します。そして、村の生活はよくなると思います。」

ぼくたちは真剣におじさんに語りかけた。

「なんでお前たちは、そんなことが分かるんだ？でも、そうやってはげましてくれてうれしいよ。」

ふとおじさんの船を見ると、「昭和丸」と書いてある。もしかしてと思い聞いてみた。

「おじさん、今って昭和の時代ですか。」

「昭和30年だよ。何言っているんだ、当たり前だろ。」

「ええっ！」

やっぱり、タイムスリップしていたのか。

その時だった。スルツと何かにすべったような感覚がした。わかめにすべって転んだんだ。

ぱっと目を開けると、関谷洞くつの前だった。とりにはコウタもいる。

「夢だったのかな…。」

ぼくがつぶやくと、コウタも

「ぼくも、夢を見ていたよ。平安時代と昭和の時代にタイムスリップしたんだ。」

と話した。偶然、コウタと同じ夢を見ていたのか。

「でも、夢だったとしても、すごかったな。」

そうだ。ぼくたちは、さっきまで昔の大船渡を見ていたんだ。昔の大船渡の人たちは、大船渡にある資源をうまく使い、苦労や工夫を重ねてがんばってきたんだ。

「これから大人になるぼくたちも、昔の大船渡の人たちに負けないようにがんばらないといけないね。」

大船渡の人たちの努力、がんばりが伝わってくるような夢。コウタと二人、そんな夢を見ていたんだな。

「もう帰ろうか。」

「うん。」

立ちあがったとき、足もとに何かが落ちていることに気がついた。見てみると、そこには、きれいに光る金が落ちていた。



奨励賞

## 【中学生部門】

海は心の家

綾里中学校一年 舘脇 実憂

幼い頃、父ちゃんが本を読んでもくれた。その本の表紙には「海」とある。

「これ、何て読むの？」と、父ちゃんに聞くと、

『ウミ』だ。うみと同じだ」

と、白い歯を見せて笑った。私も同じだと言って笑った。そして

「海はみんなの家だ。海は宝物なんだ」と言う父ちゃんの言葉が私は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

私の名前は「浜石うみ」。綾里小の六年生。家族は父ちゃん、母ちゃん、じいちゃん、そして私の四人だ。

家は代々漁師。もちろん、父ちゃんもじいちゃんも漁師。漁で忙しい父ちゃんと普段顔を合わせることはほとんどない。私から父ちゃんを取り上げた海が、私は嫌いだ。同じ「うみ」という自分の名前も。

夏休み初日。朝から快晴。でも、楽しいことは何一つない。音を無くしたような家の中に一人でいると、

なんだか悲しい気持ちになるので散歩に出ることにした。行き先は決めていなかったが、足は自然と海に向いていた。海に着くと「おっ、うみか？」聞き覚えのある元気な声。振り返ると近所の広子おばちゃんだった。

「広子おばちゃん、こんにちは」

「ああ、こんにちは。うみ、何してんだ？」

「うん、ちよつと散歩。おばちゃんは？」

「今日はなぜ（ウニ）が開いたから、手伝ってたんだ。」

いやー、今年の大船渡のかぜは小さくて全然だめだー。去年はおもしえぐらいに採れだんだもなあ。その前の年も・・・」

「へえー。あつ、広子おばちゃん、ごめんね。ちよつと用事思いだしちゃった。またね」

そう言って、長くなりそうな話から逃げ出して、引き返した。そっかあ、かぜ開いたんだ。昔父ちゃんと一緒に採り方やむき方教えてもらったっけ。懐かしいなあ。今日は父ちゃんも採りに行ったのかなあ。そんなことを考えているうちに家に着いた。

夕方になり、食事の準備を手伝っていると、玄関が開く音。父ちゃんやじいちゃんのかぜの口開きの時期はいつもより帰りが少し早い。でも今日は早過ぎる。朝漁をして、昼にかぜをむき、夕方船の掃除や道具の

修理をして、もっと遅くに帰ってくるのが普通だ。玄関から聞こえる父ちゃんの「ただいま」の声も心なしか元気がない。

「お疲れ様、今日はどうだった？」

母ちゃんが空の弁当箱を受け取りながら聞く。

「全然だめだ。身が小さ過ぎて、あれじゃ売り物にならない」

そう答える父ちゃんの眉間にはしわが寄っていた。

「うみ、宿題ちゃんとやってんのが？」

突然聞かれて少し戸惑いながら「ちゃんとやってるよ」と答えた。

「聞けば『やってる。やってる。』って言うけど、真面目にやらないとダメだぞ！母ちゃんに迷惑かげんよ」

少し怒ったような言い方に私はかちんときた。

「何なの、うみのことなんかいつも見てないくせに、そんな父ちゃんに何が言えんのよ！命令しないでよ！」

「親に対して何だその口のきき方は！」

怒鳴る父ちゃんに、私の口からは勝手に言葉が出ていた。

「海のことしか考えていない父ちゃんに私の何が分かるの？どうせ私より海の方が大事なんですよ！父ちゃんなんて嫌い！」

気づくと家を飛び出していった。後ろから名前を呼ぶ声が追いかけてきたが、私は走り続けた。走って走ってたどり着いた先はやはり海だった。暗いコンクリートに外灯の明かりが落ちていた。誰もいない海。私は海に向かって思いっ切り叫んだ。

「海なんて嫌い！海なんか無くなれ！」

涙が流れて止まらなかった。涙は流れ飛んで海に落ちた。すると海が一瞬光ったような気がした……。あれ、目の錯覚かな？

帰りはどの道をどう帰ったのかよく覚えていない。家に戻ると母ちゃんとじいちゃんが駆け寄って来た。

「心配してたのよ」という母の言葉を無視して、私は階段を上がり、部屋の布団に潜り込んだ。なぜかまた涙が込み上げてきた。父ちゃん、怒ってるかな……。

目が覚めて時計を見ると九時を過ぎていた。何だか体が重い。着替えて茶の間に下りていく気にはなれず、再び布団の上に横になる。母ちゃんが仕事に行くまでこうしていよう。

九時半頃、玄関の戸を開ける音がした。母が出たのを確認して、階段を降りた。テーブルには、ラップをかけた朝食と昼食が置かれていた。朝食をありがたういただき、お皿は洗って片付けた。その後はひたすら宿題をして過ごした。おかげで、夏休みの宿題のほと

んどは終わった。でも、気分はなんだかどんよりとしている。

午後五時を知らせる「Jイエスタデー」が聞こえてきた。この曲が終わるのと母ちゃんの「ただいま」は同時だった。「おかえりなさい」と言うとき、母ちゃんは「うみ、今日はうみの大好きな『魚介コロッケ』よ。手伝ってね」と言って笑った。そしてエプロンを着けると、たまねぎの皮をむき始めた。私はいつもと変わらない母ちゃんの様子にほっとして、食事の準備を始めた。テーブルに箸を並べていると、背後から母ちゃんの優しい声。

「うみ、あのね、父ちゃんはあなたのこと誰よりも大切に思っているのよ」

「ウソだよ。父ちゃん私のこと全然かまってくれないもん」

「漁師って大変なの。家を守らなくちゃいけないの。家計を守ろうとしているのよ」

振り向くと、みじん切りのたまねぎが目染みしたのか、母ちゃんは眉間を寄せて今にも泣きそうな顔をしている。その顔がおかしくて吹き出しそうになるのをこらえながら「うん、分かっているよ」と答えた。

玄関が開く音がした。父ちゃんとじいちゃんが帰って来た。母ちゃんが、手をエプロンの裾で拭きながら

迎える。「お帰り。早かったのね」という母ちゃんの言葉に、父ちゃんの返事は無い。そのまま茶の間に来て、どかっとあぐらをかいて座った。そして、深刻な表情で言った。

「海から魚介が消えた。海の中は海面に近いところまでも昼でさえ真っ暗だ」

台所で立って聞いていた私は思わず声を上げそうになった。それはきつと私のせいだ。私が昨日の夜あんなことを言ったから……。父ちゃんがドンとテーブル強く叩いた。

「クソっ、これじゃ、大船渡の海は何も捕れなくなってしまう。こんな状態が続けば、俺たち漁師は食っていけなくなる」

握りしめたこぶしはふるえていた。母ちゃんが父ちゃんの背中をさする。その横で、じいちゃんも黙って下を向いたままだ。こうなったのは、私のせいだ。何とかしないと。何とか……。あつ、そうだ！昔父ちゃんに読んでもらったあの本！今の状況は、あの本に似ている。もしかしたら、解決に繋がるヒントがあるかもしれない。私は階段を駆け上がり、自分の部屋を探した。あ、あった！本は棚の後ろに落ちていた。表紙の「海」の字についていたほこりを手で振り払い、ペー지를めくる。このお話は少女が落とした一粒の涙が

海の光と海中の生物を全て消してしまう話だ。でも、その後どうやって海を元に戻したんだっけ？私はペー지를めくった。

少女は海の光を取り戻すために旅に出て、海の神वादつみが眠るといふ石櫃を見つめる。その蓋には、固く閉ざされた石櫃を開くヒントが深く刻まれていた。「満月の夜わだかまりが解かれし時 生命の源はよみがえる」――

これだ！私は階段を駆け下り、言った。

「父ちゃん、一緒に海に行こう」

訳がわからず驚いている様子の父ちゃんの手を引っ張って、海まで連れ出した。外灯の下で手を放して向き合う。父ちゃんは首の後ろをかいいた。困ったり照れたりしたときの癖だ。久しぶりに正面から見ると父ちゃんの顔は疲れているようだった。外灯の光の加減か、髪には白いものが見えた。私は深呼吸をしてから「父ちゃん、ごめんね」といった。私を見つめ、黙ったままの父ちゃん。私はどうしたらよいか分からず首の後ろをかくと、父ちゃんはくるっと向きを変えてしまった。よく見ると大きな背中がふるえている。「父ちゃん、大丈夫？」と聞くと、父ちゃんは再び私の方に向き直って言った。

「ごめんな、うみ。いつもうみのことかまってやれな

くて。寂しい思いをさせてごめんな。うみ、もう一回チャンスを与えないか。うみの父ちゃんで見られるチャンス」

そう言う父ちゃんは頭を下げた。私の方が悪いのに・・・。

「父ちゃんは悪くないよ。私が家族のために一生懸命働いてくれている父ちゃんにひどいことを言っちゃった。父ちゃんはこれからも私の大事な父ちゃんだよ。父ちゃん、大好き」

言っている間に涙が出てきた。それが少し恥ずかしくてうつむくと、父ちゃんの大きな手が私の頭に置かれた。その時だった。海の方から黄金色の光がさした。今度こそ見間違いじゃない！父ちゃんも驚いた顔をしていた。

帰り道、父ちゃんが話してくれた。

「うみの名前はな、父ちゃんが付けたんだ。うみのようにみんなに幸せや勇気を与える心の家のような女の子になってほしいと願ってたな」

初めて知った事実。私は嬉しくて嬉しくてたまらなくなり、つないだ手にぎゅっと力を込めた。

翌朝、綾里漁協から放送が流れた。

「明日、四時から六時までかぜの開口をいたしますのでお知らせします。・・・」

それは海が元に戻ったことを伝えていた。



### 【高校生部門】

木霊

大船渡高校二年 荒木 顕仁

僕は超能力者だ。こんなことを言ってしまうとただのイタい高校二年生なのだが、実際にそうなのだから仕方がない。といっても、空を飛んだり自然現象を操ったりというような超常的なものではない。というか、こんな能力を持っていたら、人口が少なく情報の拡散が早いこの地域では一躍有名人になっているだろう。ではいったいどんな能力なのかと気になっている方のために説明すると、僕の能力は木々の精霊、つまり木霊と意思疎通ができる能力だ。

僕は眠っている間に夢の中で木霊たちと意思疎通できる。なぜかその夢で見聞きしたことは全て鮮明に思い出すことができ、その中で彼らは願いを伝えてきた。特に強い力を持っている木霊とは起きているときでも会話できるが、なかなか出会うことはできない。

そしてその夢を見た後は、願いをしてきた彼または彼女に一度現実で会いに行く。といつても山の中まで行くわけではない。僕に願いをしてくるのは、人里に近い範囲の木霊たちだからだ。つまり、彼らの悩みは人間が原因であることが多いのだ。そうすることで、たいていはその木霊が抱えている願いを解決できる。それでは、今日は僕が実際に体験したとある木霊の願いをあなたたちに話そうと思う。といつてもかなり昔の記憶なので、言葉は変わってしまっているだろう。

これは今から五年前、二〇一二年九月の話である。僕が住んでいる陸前高田市は、当時、東日本大震災の影響で店舗などはまだまだ数も少なかったが、日常生活が問題なく送れるほどには復興が進んでいた。当時小学六年生だった僕は、いつものように布団に入り、眠りについて。すると、木霊がやってきて僕に話を始めた。

「どうやら少し前に枯れてしまったわしの友が、モニュメントとして保存されるらしいのだ。我ら植物は枯れた後は自然の摂理に従い、倒れ、分解され、新たな命へとこの身を捧げる。しかし、彼はその摂理に従うことができないのだ。人間が勝手な都合で、彼の死後巡るべき道を変更しようとしている。」

「あなたはいったい…？」

夢の中で僕は尋ねた。

「いづれ分かる時が来るだろう。今は名乗るまでもない。」

そう言われた僕は素直にそれを受け取るしか無かった。「わしの友は背の高い松なのだ。その高さは他の松より一〇メートル以上高かったらしい。その高さが功を奏して、彼はあの震災からその身を守ることができた。しかし、二〇〇〇いたという彼の友は彼を除き全て流されてしまった。彼の心痛は想像することもできないだろう。」

僕は彼の感じた痛みを想像しようとした。しかし、その痛みを想像することはかなわなかった。

「彼は、ただ一本の樹木として、新しい命の礎になりたいと言っていた。しかし、自分勝手な人間が、自分達の都合のみを重視し、彼の願いを踏みにじろうとしている。わしとしては、彼の願いを叶えてやりたいのだが、わしにはどうすることもできない…」

声の主はそこで一度言葉をきった。そして、少し間をおいて、僕に頼みをしてきた。

「我々は基本的に人間に何も伝えることはできない。つまり、彼がモニュメントとして保存されることを変えることはできないのだ。そこで、もし可能なら君に彼が今何を思い、どんなことを考えているのか聞いて



きてもらえないだろうか。」

僕は疑問に思い、声の主に問いかけた。

「でもあなたの友はもう枯れてしまっているんですよ。僕は枯れてしまった樹木の木霊とは話すことはできませんよ。」

すると、声の主はあたかもその問いを予期していたかのように答えた。

「君が言っているのはあくまで普通の木霊の話だろう。彼は特別なだよ。」

「特別っていったいどういうことですか。」

「彼が枯れてしまった後も、彼のもとを訪れる人間は多いのだよ。もしかしたら彼は、彼のもとを訪れる人間が発したエネルギーを少しずつもらい受け、木霊をこの世に残しているかもしれないのだ。」

「そんなことができるんですか？」

「現にわしがそうなのだ。といってもまだ枯れていないからなんとも言えないが、わしはわしのもとを訪れる人間が発したエネルギーを少しもらい受けているのだ。私もそろそろ限界が近くてな。今君に話しかけるだけでもかなり辛いのだよ。」

声が少し遠ざかったように感じた。

「分かりました。もしあなたの友の木霊がこの世に残っているのなら、僕はあなたの頼みを聞きましょう。」

「ありがとう。では頼んだぞ。」

声の主は笑ってそう言った。

しかし、所属していたスポーツ少年団の活動や学校などがあつたために結局彼のもとを訪れることができたのは、それから三週間ほど経ったあとのことだった。

声の主が提示してくれた「モニュメント」として保存される「背の高い松」、「二〇〇〇もの友人」、「多くの人間が訪れる」という条件に当てはまるのは恐らく奇跡の一本松だろうと思い、BRTを利用して奇跡の一本松のもとへ向かった。そこには思ったより多くの人がいて、地元になんにも人が来てくれる観光名所があることを少し嬉しく思った。しかし、彼は彼の体だけが観光名所となることを望んでいるのだろうか、もし望んでいなければどうすれば良いのだろうか、そもそも本当に彼の木霊は残っているのかということを考えて、憂鬱な気持ちにもなった。そんなことをとりとめもなく考えているうちに、僕は奇跡の一本松に到着していた。手頃なベンチに腰を落ち着けて眠りにつこうとすると、

「眠らなくても私と会話できるよ。」

と優しい声が頭の中に響いてきて、僕は驚きながらも、

「あなたは奇跡の一本松ですか？」

「ええ、そうです」

声の主は肯定したことによって、彼の木霊がその場所に残っていたことを確認し安堵感を覚えた。

「今さらですが、君は私の声が聞こえるんだね、驚いたよ。」

「物心ついたときにはすでにできるようになってたのであまり意識してなかったんですけどね。」

「君は面白いね。」

彼は愉快そうに言った。

「それで、何か聞きたいことがあるんじゃないのかな？」  
急にそんなことを言ってきたので少し面喰らってしまった。

「どうしてそう思いました？」

「いやなに、人間からエネルギーを受け取っているうちに彼らが何を考えているのかだいたい分かるようになってきたものでね。彼らからもうエネルギーは一樣じゃなくて、その時何を考えているのか、その人が大人か子供か、男か女か、なんていう要因で少しずつ違うのだよ。」

「そうなんですか。それは良いことなんじゃないですか？」

「それがそうでもなくてね」

声が少し硬くなった。

「悲しんでいる人のエネルギーは私に昔の友人たちを

思い出させたりするから一概に良いとは言えないんだよ。」

「そうだったんですか。それは大変ですね。」

「いや、私がいるだけで誰かの支えになれているのは嬉しいことだよ。もうすでに枯れてしまっているも彼らが私を見て元氣を出してくれるなら、と思っているのさ。」

彼はそう言って一度間をおいた。

「話が脱線してしまったね。では、君が聞きたいことに答えよう。」

「では、話させてもらいますね。」

僕は話を切り出した。

「率直に言うと、僕が聞きたいのはあなたがモニメントとして保存されることをどう思っているのか、ということですよ。」

「ふむ、なるほどね。」

しばしの沈黙。その後、彼は言葉を発した。

「嫌じゃない、と言うと嘘になってしまふね。私だって本当は、私達の先祖がそうであつたように、枯れた後は倒れ、新たな命の礎になりたかった。」

「それではあなたは？」

「しかし、この事を後ろ向きにはとらえていないよ。」

「え……？」

思わず僕は聞き返した。

「もちろん私個人としては私がモニュメントとして保存されることは嫌だ。しかし、私がモニュメントとなることで、救われる人間がいると最近わかってきた。そんな彼らが新しい命を育んでくれる。つまり、間接的ではあるけれど、私は本来の願いを叶えられるということなんだよ。」

「すごい……」

思わず口に出ていた。心からそう思えたから。自分のことではなく他人のことを第一に考え、そこに自分の存在意義を見出す、そんなたったそれだけのことをしているだけなのに、彼からはとてつもない何かが感じられた。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。私の友も同じようなことを言っていたけれどね。」

「そういえば、あなたの友はいったい誰なんです？」

「彼から聞いていないのかい？」

「ええ、まあ。そのうちわかるとは言っていましたけど。」

「私の友人は今泉天満宮の御神木だよ。」

「そうだったんですか。」

「あの震災の前の友はみんな流されてしまったからね。」  
彼はそう言って言葉を切った。空気が少し重くなったように感じた。

「最後に君のような人に出会えて良かった。」

「最後……？ 最後っていうのはつまり……」

「ああ、私はそろそろ消えてしまうだろう。流されたみんなのもとへ行かなければならない。少し長くこちらに居すぎてしまった。肉体が死ねば精神も滅びる。至極当然のことだ。むしろ私がその流れに逆らっていたのだから、いつかは終わりが来て当然だよ。」

「嫌じゃないんですか？ 自分という存在が消えてしまうことは……？」

「ご先祖様だってこれを体験しているんだ。自然の摂理に従うだけだし、嫌じゃないかなんて愚問だよ。」

「そうですか。それでも僕は、あなたが消えてしまうことをとても残念に思います。あなたはとても立派だ。」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。」

彼はそう言った。彼の気配が遠のいていく感じがした。

「ではまた、いつか会えることを願っているよ。」

「はい、僕もそれを願っています。」

彼の気配が完全に消えた。その後も僕は、しばらくそこを動く気になれなかった。

その後、僕は天神杉の元へとむかい、彼の言っていたことをありのまま話した。すると彼は

「そうか……そんなことがあったか。ありがとう。君のおかげでわしも心配事が一つ消えた。礼を言おう。」

と言った。

あれから五年がたち、一本松はモニュメントとなり、天神杉も今は切り株しか残っていない。でも、僕はわすれない。彼らのような立派な木霊たちがいたことを。そして彼らが、何よりも自分達が根付いたこの場所の復興を願っていたことを。



奨励賞

## 【一般部門】

椿のおまじない

紺野 清美

「ただいま・・・。」

お母さんが夕食に使う野菜を切り刻んでいると、椿ちゃんも学校から帰ってきました。

「お帰りなさい。遠足は楽しかった？」

お母さんが聞くと、椿ちゃんは、

「うん・・・。」

と気のない返事をしました。

なんだか元気がなさそうです。

「どうしたの？何かあったの？」

そう聞いても、椿ちゃんはずっとうつむいて、じっとしています。

「お弁当、おいしくなかった？」

その答えに、椿ちゃんは首を左右に振りました。

「先生に怒られた？」

これにも首を左右に。

「クラスの誰かに、お気に入りの洋服のことで、何か嫌なこと言われた？」

これにも。

「遠足で何か、怖いものでも見た？」

これにもです。

「それじゃあ、いったいどうしたの？」

お母さんが聞くと、椿ちゃんはまたうつむいてしまったのでした。

かと、思ったら、ふいに顔を上げて、

「あのね、ママ。」

と話しました。

「ん？」

お母さんが聞き返すと、

「・・・前に話したと思うけど、渡君って覚えてる？」

そう聞かれて、お母さんは少しの間、何かを考えているようでしたが、すぐに、

「ああ！」

と、右の手の平を左手で打ってから、こう答えたのでした。

「椿が二年生のとき、隣のクラスに転校してきた子でしょ？参観日るとき、椿に教えてもらったから覚えてるわ。イケメンのとっても、綺麗な子よねえ。」

「そうでしょ？」

とたずねたような言い方が終わると、椿ちゃんはこくりとうなずきました。

「その渡君がどうしたの？渡君と何かあったの？」

お母さんはつとめて、優しくゆっくり聞きました。

野菜を刻んでいた手も、野菜の乗っているまな板と包丁からはなれていました。

椿ちゃんの通う学校は、今日は全校一斉の遠足があり、渡君のクラスと合同で、五葉山へと行ってきました。

綺麗なお花や珍しい葉っぱや木の実、動物の足跡や巣穴など、自然の見せる姿や形に触れて、とても楽しい時間を過ごしたのですが、帰りにちよつとした事件があったのです。

誰かがふいに、こんなことを言いました。

「ここってさ、ヘビが出るんだよね？」

それを聞いた椿ちゃんは怖くなって、集合場所から一歩も動けなくなってしまったのです。

気がつけば、先生やみんなはいなくなっていて、椿ち

ゃんは迷子になってしまいました。

さつきまでの楽しかった場所が、今はうそのように、そして怖いぐらいに静かです。

椿ちゃんは、今度は一人ぼっちになったことが怖くなり、みんなに追いつこうと、山を駆け出しました。

ところが、いくら走っても、どこを探しても、みんなの姿を見つけることができません。

そのときです。

「あつ。」

何かにつまずいて、椿ちゃんは転んでしまいました。椿ちゃんはまだ、走るのが嫌になり、あきらめようとしていました。

（私・・・このまま遭難しちゃうの？）

絶望が心を覆いつくそうとした、そのときです。

「あつ、いたいた、見つけ。」

そんな声が、近づいてくる何かの足音と一緒に聞こえてきました。

不思議に思っ、辺りを見回しますが、やっぱり、何の姿も見えません。

すると、

「こっちだよ。」

声のした方を椿ちゃんが向くと、

「よかったあ、こんな所にいたあ。」

そこには、見覚えのある、整った顔立ち。

渡君が立っていました。

「先生が点呼してたら、いないのが分かってき、慌てて探し出したんだ。でも、無事に会えてよかったよー。動物に襲われでもしたんじゃないかって、みんな心配してたから。」

言いながら渡君が駆け寄ると、椿ちゃんは声をあげて泣き出しました。

渡君は一人でここに来ましたが、それでも知ってる子に出会えたから、ほっとしたのかもしれない。

泣きながら山を下りるわけにはいけないので、二人は少し、話をしました。

この遠足に行く前から、二人はときどき一緒に遊んだりすることがあったので、今となつてはそんなに不思議なことではありませんでした。

クラスであつたこと、教室で飼つてゐる金魚や亀、給食、最近読んでるマンガ――。

話している中で、椿ちゃんは段々に落ち着いていき、ついには笑顔を見せました。

二人はおやつを交換しました。

椿ちゃんは“かもめのたまご”という卵型のお菓子。「水筒の中身はカルピスなの。甘くておいしいんだ。」渡君は“鳩サブレ”という鳩の形をしたクッキー。

「そうだ。甘い物が好きなら、これもあげるね。」

と、差し出したのは、キャンディ。

右の手の平に五つ、ありました。

二人は自分たちのおやつを、おいしそうに食べました。

「・・・椿ちゃん、あのね。」

少し、しんみりしたような声で、渡君が呼びました。

「ん？なに？」

「まだ誰にも言つてなかつただけど、実は僕ね・・・。」

「うん。」

「僕ね・・・六月を過ぎたら、学校が変わることになったんだ。」

「・・・え？」

椿ちゃんは、渡君が何を言つたのか、分からなかった、と思ひました。

「父さんの仕事の都合で、アメリカへ行くことになったんだ。」

信じられませんでした。

さつきまで口いっぱいに広がっていた、サブレの味が分からなくなつたんじゃないかと思ひました。

椿ちゃんは話についていけず、ただ頭の中で渡君の言つたことが、ぐるぐる周っているだけでした。

それからバスに乗って、いつもの駅で降りるまで、渡君と話をした後のことは覚えていませんでした。

話していたら、椿ちゃんはしゃくりあげ、瞳からは涙があふれていました。

「ママあ、どうしよお・・・。」

お母さんは優しく椿ちゃんを抱きしめました。

「椿は、渡君のことが好きなのね。」

「・・・うん。」

お母さんは、椿ちゃんから少しはなれると、肩の両方に手を置いて、真っすぐ椿ちゃんを見て言いました。

「それじゃあ、気持ちを伝えましょうか。」

お母さんもおばあちゃんから教わった、とびっきりのおくりもの、教えてあげるから。」

椿ちゃんはグーでこするように涙をふくと、

「・・・うん。」

はつきりとした声でうなずきました。

コア色の髪がからかわれるのが恥ずかしくて、学校へ行くのが嫌だったけど、転校初日から庇ってくれて、自分の目の色と一緒にだって言ってくれた。

そこから一緒に勉強したり、遊んだり、困ったことがあったら助けてくれた。

いろんな思い出を胸に椿ちゃんは練習に励みました。

——そして、渡君の出発の日。

みんなが給食を食べるころ、渡君は空港に行くため、帰ります。

下駄箱に行くと、外ぐつの上に何か挟まっていました。

「なんだろう？」

包みを手に取ると、お母さんから声がかかりました。

「渡ー、そろそろ行くわよー。」

「あ、はい。」

車に乗って開けると、それは少し小さめですが、キャンドルでした。

「んー、いい香りだ、これは椿だな！」

前で運転しているお父さんが言いました。

ふと、渡君はキャンドルの箱以外にも、何か、ピンク色した、四角いものが入っているのに気がつきました。

それは、ピンク色のふうとうに椿のシールでふたがしてある手紙でした。

（ねえ、椿。いいこと教えてあげる。うちでは代々、好きな相手に椿のおくりものをすると結ばれるって言い伝えがあるの。だから、椿も何か椿を使ったものをおくってみるといいわ。どれだけの効果があるかは・・・お母さんとお父さんを見れば分かるでしょう？）

窓の外を見ながら、椿ちゃんはお母さんの言葉を思い出していました。

夏休みの少し前、一通のエアメールが椿ちゃんに届きました。

## 作品集

### 《小学生低学年部門》

ゆうと金のつぶ

吉浜小学校二年 木村 有佑

むかしむかしのそのまたむかし、吉浜の千歳に「ゆう」という子がおりました。ゆうは、つぶとりが大すきでした。

今日も、じじとつぶとりをしました。じじは、あみとバケツを持っていききました。今日は、ちよつとなみがあります。でも、空はいい天気です。じじは、けいトラをとめました。そうして、あみを出し、海を見ました。つぶは大好きです。つぶがいっぱいとれました。

こんどは、ちがうところに行きました。そこにもいっぱいいました。じじとゆうがとろうとすると、でかい魚が来て、ぜんぶつぶをおとししまいました。

二人がさがしていると、一つだけ、ちよつととおくの方につぶを見つけました。じじがそれをとったところ、なんと金色のつぶでした。じじは、びっくりしてしりもちをつきました。家にもって帰ると、ばばもマ

マもびっくりしました。

じじは金のつぶを食べてみました。

「おいしい。」

すると、ふしぎなことがおきました。食べたはずなのに、つぶはなくなりませんでした。みんな、またびっくりしました。また食べてみても、のみこんだらすぐに出てきます。

「このつぶは、大切にしないと。」

と、じじは言いました。

つぎの朝早くから、じじはつぶをいっぱい食べまくっていました。ゆうは、「よっぽどおいしいんだなあ。」と思いました。

その日、また海に行ってみると、つぶがいっぱいありました。だけど、じじは

「もう、とらなくていいんじゃない。」

と言いました。ゆうは、「金のつぶがあるからだ。」と思いました。そして、家に帰ったら金のつぶを食べました。金のつぶは、木村家のたからものとなって、だいにれいぞうこにしまつてあるんだとさ。おしまい。



スネカのもくじいのくふう大作せん

吉浜小学校二年 庄司 直翔

むかしむかし、吉浜にスネカのもくじいがありました。

ある日、二人のきょうだいの家に行きました。スネカは、こう言いました。

「なくわらすは、いませんか。」

けん太が、

「こんなスネカ、こわくないな。」

と、わらって言いました。もくじいは、「くやしい。」

と思いました。そして、がっかりして家に帰りました。

もくじいが家に帰って時間がたつと、友だちの、かいがじいが来ました。

「もくじい、なんだ、しょぼんとして。」

すると、もくじいと言いました。

「かいがじい、手つだってくれ。」

「わかった。なんか、くふうをしよう。」

そして、二人はくふうを考えました。かいがじいと言いました。

「もっと、おめんをこわくしよう。」

もくじいと言いました。

「もっと、ほうちょうを長くしよう。」

そして、もくじいとかいがじいは、じゅんぴをしま

した。

「こんどは、ちよつとれんしゅうしよう。」

「まずは、声をれんしゅうしよう。」

もくじいは、

「なくわらすは、いねいが？」

と言いました。

「もっと、もっと。」

「なくわらずば、いねいがあ？」

もくじいは、大声で言いました。

「つぎは、足の音をもつとうるさくしよう。」

ドン、ドン。

「よし、いいな。」

「よし、行こうか。」

「さてさて。さけをのんで元気をつけてから行こう。」

そのころ、けん太とたけしは、家で

「スネカなんて、こわくないや。」

と言ってまっていました。

家の中に、もくじいとかいがじいが入りました。ドン、ドン。

「なぐわらずば、いねいがあ？」

れんしゅうどおり、言えました。すると、たけしとけん太が

「こわい。こわい。」

となきました。

これからは、スネカをなめてはいけないのです。吉浜の子どもたちは、楽しく生き生きとくらししましたとさ。

## 海のかみさま

吉浜小学校二年 佐藤 晃善

ここは吉浜。きれいな山と海のある町です。そこに、あつきという元気な男の子がいました。

ある日、あつきが歩いていたら友だちのなおとくんに会いました。あつきは、

「海に行こう。」

と言いました。二人であそんでいると、あつきは、海でおしっこがしたくなりました。なおとくんは、

「あつき、だめだよ。海のかみさまにおこられてしまうよ。」

と言いました。あつきは、こう言いました。

「いいんだよ。いいんだよ。」

あつきは、言うことをききませんでした。

次の日、あつきとなおとくんは、また海に行きました。そして、なおとくんが

「ジュースを買ってくるね。」

と言いました。まっていたあつきが、水どうから水をだそうとしたら、水が出なくなっていました。

「あれ、おかしいな。」

そうしたら、海のかみさまが出てきました。

「お前、きのう海でおしっこをしただろう。海をよこしただろう。もうお前には、水はやらない。」

かみさまは、そう言うと、海にきえてしまいました。

あつきは、かなしくなりました。「ぼくはもう水がのめないんだ。ぼくは、もうしんでしまうんだ。」

あつきがいないっていると、なおとくんが来ました。なおとくんが、

「どうしたの。」

と言いました。あつきは、わけを言いました。

「そうだ。さくせんかいぎをしよう。」

「海のごみをひろえば、海のかみさまがゆるしてくれるかもしれないよ。」

「魚たちも元気になるし、水ものめるからいいかも。」

「二人でさつそくはじめよう。」

ごみは、ふくろとカンと木でした。

「ああ、きれいになってきたな。かみさまに見せたいな。よろこぶかな。」

すると、海のかみさまが出てきて、

「海がきれいになったな。ゆるしてやろう。」

「ありがとうございます。これからは、海におしっこをしません。」

「これから、海をまもっていきます。」

あつきとなおとくんは、まじめな顔で言いました。

「吉浜の海をよろしく。」

かみさまは、そう言うときえてしまいました。

あつきとなおとくんは、元気にくらしていききましたとき。

## けしゴムくんとスネカ

吉浜小学校二年 小松 颯太

けしゴムくんは、古い家にすんでいました。けしゴムくんは、とてもはたらきものです。けしゴムくんは、吉浜小学校の子どもたちが字をまちがえたとき、けしごとをしています。今日は、ここみちゃんにいつばいけされました。

「ああ、今日はいつばいけされたなあ。でも、やくにたててよかったなあ。」

つかれたけしゴムくんは、家に帰るとぐったりしていました。すると、スネカがやってきました。

「なまけものはいねが。」

けしゴムくんは、気がつくとき、ろうやの中にいまし

た。けしゴムくんは、びっくりしました。そうしていううちに、スネカが来て、

「お前はさぼって、ぐうたらしていたから、ここにいろんだ。」

と言いました。

「でも……」

けしゴムくんが言おうとしたしゅん間、スネカはいなくなっていました。

「どうしていなくなっただろう。」

けしゴムくんは、ひとりごとを言いました。

「でも、このままだったら、しんでしまう。おれがいなくなったら、まちがえたとき、子どもたちはこまるだろう。子どもたちが心ばいだなあ。」

すると、とつぜん

「ぼくは、えんぴつくんだ。お前をたすけに来た。」と声がしました。

「ろうやのかぎはどこだ。」

「上。」

「よし、分かった。」

えんぴつくんは、えんぴつの先でかぎをあつというまにあけました。

「たすけてくれて、ありがとう。」

そして、二人はスネカに話をしに行きました。

「本当は、けしゴムくんははたらきものなんです。がんばりすぎて、ねていたんです。」

スネカは、話を聞くとこう言いました。

「そうだったのか。すまない。まちがえて、なまけものだと思ってつれて来てしまった。おれがまちがっていた。本当にわるかった。これからも、しごとをがんばってくれ。」

「スネカさんも、がんばってね。」

そして、二人はぶじに家に帰り、なかよくくらししました。

### 金色のたんぽぽとしろちゃん

吉浜小学校二年 中井 よし華

吉浜小学校の校庭に、ちようちよのしろちゃんがいました。しろちゃんは、やさしい子です。お友だちに、いいものをあげたりしています。

しろちゃんは、おなががすいていました。しろちゃんは、タンポポを見つけました。そのたんぽぽの色は、金色でした。しかも、大きかったです。しろちゃんは、びっくりしました。しろちゃんが、たんぽぽにききました。

「みつをのんでいい。」

「いいよ。」

しろちゃんがのんでいると、てんとう虫が来ました。

いじわるのてんとう虫でした。てんとう虫は、じやまをしてきました。てんとう虫は、大きな声で

「どけ。」

と言いました。しろちゃんは、しかたがないと思ってどいてあげました。

その声が、花たちにも聞こえました。花たちは、しろちゃんをたすけに行きました。

「わたしたちは、やさしくしてもらってばかりだから、こんどはわたしたちがやってあげなきゃ。」

花たちは、力をこめて校庭いじゅうをいいおいにしました。てんとう虫は、

「ごめんね。」

と小さな声で言いました。花のにおいをかいだてんとう虫は、やさしい心になりました。

そして、みんなで見つをのみました。てんとう虫が言いました。

「おいしいね。」

「そうだね。」

しろちゃんたちは、おなかいっぱいになりました。もう、てんとう虫は、いじわるをしなくなりました。

ゆきちゃん、スネカにつれていかれる」

吉浜小学校二年 浅沼 凜花

今日は、小正月。ゆきちゃんは、心ばいでした。わけは、スネカが来る日だったから。

「いつもないてばかりだから、わたしスネカにつれていかれちゃう。」

と、なみだをこぼしそうになりました。

よる、スネカが来ました。おへやのはじっこにいたうさぎも、おりがガタガタと音をたてるくらいふるえてこわがっていました。

ゆきちゃんは、スネカがせおっているものに、くつがあるのに気づいて、「ぎよっ。」としました。

スネカが帰った後、お父さんとお母さんがゆきちゃんの方を見ました。すると、さっきまでいたはずのゆきちゃんがいません！スネカにつれていかれてしまったのです。

大くぼ山につれていかれたゆきちゃんは、スネカにこう言われました。

「お前、家でなき虫だったから、つれてきた。」

お前も分かるべ！一年間、大くぼ山で、しゅぎようだ！」

まず、スネカは、

「そうじをしろ。」

と、きびしく言いました。つぎに、

「木を切れ。」

と言いました。つらいしごとをたくさんして、なきそうになりました。

その時、ゆきちゃんは気づきました。「たとえ、つらいしごとでも、ないちやいけない。そのためのしゅぎようなんだ。」

そう思うと、なきそうなのを、ぐつとこらえてしゅぎようをしました。

そのようすを、スネカが見ていました。

「だいぶ、がまんづよくなったな。この一年で帰してやろう。」

つらいつらいしごとを休まず、なかず、ゆきちゃん、いっしょうけんめいにがんばりました。体中、きずだらけになりました。がんばって一年たちました。

スネカが来て、こう言いました。

「もう家に帰っていい。なき虫したら、またつれてくからな。」

ゆきちゃんは、元気よく言いました。

「はい。ありがとうございました。」

家に帰ったゆきちゃんは、元気よく

「ただいま。」

と言いました。お母さんが、

「どこ行ってたの。」

と心ばいそうに聞きました。ゆきちゃんは、

「大くぼ山で、しゅぎょうしていたの。」

と言ったら、お母さんは、こしをぬかすほどびっくりしました。そして、

「つらいことをしていたのね。よくがんばったね。」  
と言ってくれました。

それから、ゆきちゃんは、手つだいをたくさんするし、ピアノもすすんでやるようになりました。スネカのしゅぎょうのおかげです。

## まほうの石

吉浜小学校二年 菊地 桃子

少し前、虫のなかよし三びきがいました。ある日、ボンくんが

「となり町の大船渡まで行ってみようよ。」

と言いました。コロちゃんとエルちゃんは、

「うん、そうしよう。」と言いました。

三びきは元気にしゅっぱつしました。ところが、よるになると、三びきは分かれ分かれのまいごになってしまいました。エルちゃんとコロちゃんは、

「だれかたすけて。さみしいよう。」

とないてしまいました。ですが、ボンくんだけは、なきません。なぜかという、男の子がなくなっちゃわるいからです。ボンくんは、エルちゃんとコロちゃんをさがしに行くことにしました。自分がこわくたって、大切な友だちをまもりたいからです。ボンくんが、とびはじめたその時です。こわい人間に手を引かれ、とべなくなりました。走っても走ってもおいかけくるのです。足がつかれて立ち止まると、こわい人間にいつかれ、つかまってしまいました。

ボンくんは、ろうやに入られてしまいました。

「ちよっと、出してよ。出して。カギをわたすんだ。ちよっとかしてよ。かしてよう。」

でも、こわい人間は

「わたしわけないだろう。ばかなことを言うんじゃない。ここで、あしたまですごせばいい。」

と言って行ってしまいました。すると「シヤラン」と音がなりました。ボンくんは、「かぎの音だ。」と気づきました。ボンくんは、ほそい体を外に出して、足でとりました。

「やった。かぎがとれた。やったあ、やったあ。」

そして、ろうやから出ることができました。

でも、今は夜中の0時でまっくら。車も光も見えま

せん。ですが、地めんにぼんやりと光が見えました。よく見ると、水しようのような石でした。さわってみると、ハウスが出てきました。

「よかった。今日は、ここにとまらせてもらうことにしよう。」

ハウスに入ると、ボンくんは気づきました。

「この石は、ねがったものが出てくる石なんだ。」

すると、図かんが出てきました。もくじの九十ページになぞの石が書かれていて分かったボンくんは、さっそく九十ページをひらいてみました。「石の名前は『ものがたりの石』っていうんだ。せかいにたった三つしかない石なんだ。でも、ものがたりの石なんてふしぎな石だなあ。」とボンくんは思いました。

すると、ものがたりの石がきれいな色に光りました。

「うわあ、まぶしい。うわあ。」

ボンくんは、声をひびかせました。

「あ、ボンくん。どこ行ってたの。心ばいしていたんだよ。」

「あれ、二人とも。きみたちこそ、どこ行ってたの。」

「わたしたち、ボンくんをさがしていたの。」

ボンくんは、二人が石をもっていることに気づきました。

「あれ、ぼくと同じ石だ。どうしたの。」

「ボンくんをさがしていたら、地めんが光をはなつように、二つの石があつたから、さわってみたの。したら、目をあけられないほど石が光ったの。」

「そして、目をあけてみたら、ボンくんがいたから、石のおかげで会えたのよ。」

「よし。石の話はもうおわり。早く大ふなとに行こう。

あと少しだよ。」

「分かった。行きましょう。」

コロちゃんと言いました。

すると、きゆうに石が話しはじめました。

「わたしにまかせて。このボートにのって、さあ、レッツゴー。」

ボートは川もみずうみもないのに、すばやくうごきだしました。それは、石がうごかしているのです。まほうの石は、力をつかってへとへとになってしまいました。

「ありがとう。これで、大ふなにつけるわ。本当にありがとう。石さん。まほうがつかえるのね。」

大ふななどにつきました。今は、朝の五時です。

「やっぱり大ふなとの海はきれいだね。しかも、きれいなお店もあるよ。」

「うわあ、それに海の上に、三てつが走っているよ。」

まほうの石となかよし三人ぐみは、大ふなとの町で

なかよくくらししました。

## やさい大すき

吉浜小学校二年 八巻 心美

吉浜というところに、女の子がすんでいました。名前は、かすみちゃんです。かすみちゃんは、やさいきらいでした。かすみちゃんが、とくにきらいなやさいは、キュウリとトマトでした。

それをきいていたキュウリちゃんたちは、がっかりしていました。

ある日、吉浜小学校でやさいをそだてることになりました。かすみちゃんは、「やさいなんて、そだてなくていいのにな。どうせ、そだてたって、きらいなものはいないのにな。」と思いました。

でも、かすみちゃんも、そだてることにしました。そだてているときには、トマトには、ペットボトルで水をあげて、キュウリには、大きいじょうろで水をあげました。毎日そだてていると、だんだん小さいつばみが出てきました。かすみちゃんは、「だんだん大きくなってきたぞ。」と思いました。

つぎの朝、かすみちゃんが見てみたら、はっぱが、うどんこびようになっていました。かすみちゃんは、

がっかりしました。でも、あきらめないで手当てをしました。

まず、うどんこびようになったはっぱをとって、つぎに、くすりをやりました。そうして、たいへんなことをのりこえてきたら、ついに、お花がさきました。そして、お花がしぼんで、キュウリもトマトも大きくなりました。

かすみちゃんが、いつしようにけんめいそだてたやさいをたべたら、とてもおいしかったです。

「おいしいね。」

お友だちとお話しながらたべました。

かすみちゃんは、やさいが大すきになりました。かすみちゃんは、「そだててよかったな。」と思いました。キュウリちゃんたちも、よろこびました。

## 《小学生高学年部門》

あんなとジョンの思い出

越喜来小学校五年 及川 夢萌

あんなは、越喜来に住んでいる小学五年生の女の子です。あんなの家では、ジョンという犬を飼っています。ある日のことです。あんなが家族のみんなと朝ご



飯を食べていたとき、いきなり家がゆれ始め、物が落ちてしまいました。停電にもなっていました。とても強いゆれだったので、あんなの家族は高台にひ難しました。高台に行くと津波けい報が出され、町は大さわぎになりました。町の人達は泣いていたり、もうくたびれていたりしました。しばらくして、夜になりました。気が付くとジョンの姿が見当たりません。みんなに探しに行こうと言いたいけれど、みんなを危ない目に合わせてしまいそうです。あんなはどうしてもあきらめることはできないのですが、

「おさまってからまたジョンを見つけに行こう。」

と決めました。そして、二日、三日とたち、もう大丈夫ではないかと思ったそのとき、また、あの地震が来たのです。あんなはこの地震が起こるたびに、ジョンの事を気にし、涙が出てしまいます。それから、二日がたちました。もう津波けい報も解除になったので、あんなは姉のもとといっしょにジョンを探しに行きました。ですが、辺りはがれきでおおわれ、ジョンはなかなか見当たりませんでした。とても悲しくて、家に帰って、お父さんとお母さんに相談をしました。お父さんとお母さんは、

「きっと見つかるよ。大丈夫。心配しなくていいよ。明日、みんなの力を合わせてジョンを見つけに行こう。」

と言いました。

「うん。分かった。」

とあんなともはそう答えました。夜がすぎて朝になりました。六時に起きて、朝ご飯を食べて、ジョンを探しに行きました。けれど、日が昇ってもう三時間もたっているのですが、全く見当たる気配がありません。すると、どこからか、

「ワンワン。ワン。」

と聞こえてきました。お父さんが、

「これは、ジョンの声だ。」

と言ったので、みんなで探しに行きました。すると、段ボールの下にジョンがいました。体中どろまみれになり、弱っていました。すぐに家に連れて帰り、ジョンを洗ってえさをあげました。すると、とても元気になりました。家族のみんなは、心からほっとしました。そのことを町の人に伝えると、

「よかったね。」

とか、

「後でさわってもいいかい。」

と言われました。あんなともはこんな言葉を聞いて、とてもうれしくなりました。そして、元気になりました。あんなの心にあつたとても悲しい気持ちが無くなりました。それから、地震や津波もおこらなくなっ

たのでよかったのですが、急にジョンの体調が悪くなつてしまいました。

「大丈夫かな。」

とあんなは、ずっと気になります。病院へ連れて行く  
と、

「しばらくは入院することになります。」

と言われて、とても悲しくて、あんなは、涙が止まらなくなつてしまいました。ジョンがいなくなるとあんなは食欲もなくなり、眠れなくなりました。あんなは、  
「もういやだなあ。ジョンがいないと、悲しい。ジョン帰ってきて。」

と心の中で叫びました。すると、病院から一本の電話が来ました。

「今日、検査をしたのですが、身体に異常はありません。ですが、見つかる可能性もまだ残っているのです、もう一度検査してから、その後様子を見て、良いなと思ったら家族の元に返したいと思います。よろしくお願いします。」

と言う連絡でした。お母さんが、

「はい。分かりました。」

と返しました。

その電話を聞いて、あんなが、

「元気でかわいい姿のジョンがみたいな。」

そのことを聞いたお母さんが、

「そうだね、みんなで遊びたいね。」

といいました。そのときみんなの顔がにっこりと笑顔になりました。

そして、二日がたち、また一本の電話がきました。

病院からです。電話に出ると、

「検査をして、何も病気がないようですので、一日様子をみて、あさつてには家に帰しますのでまた、そのとき電話をします。よろしくお願いします。」

「はい。分かりました。」

とお母さんが返しました。

お母さんがあんなに伝えると、あんなはとても喜んで、

「早く、帰ってこないかな。早くジョンと走ったり一緒に寝たりしたいな。」

と言いました。

日が暮れて、夜が明きました。みんなでジョンを病院にむかえに行きました。ジョンはとても体調が良さそうでした。家に連れて帰ると、とびはねて家の周りを走り回っていました。それから公園へ行つて、それから草原、それから浜辺、次から次へと沢山遊びました。とても楽しいいい日になった、あんなはジョンのとなりでぐっすり眠りました。あんなは夢の中で、

「ジョンの毛は気持ちいいな。」

と思いました。あんなは明日も、そしてこれからもずっとジョンと一緒にいたいと思いました。

そして、ジョンが来て、二日目。今日もたくさん遊ぶぞ、と決めていました。今日は昨日とちがう公園に行って走り回りました。とても楽しい思い出になるようにたくさん遊びました。

そして、二日目も終わりその日もジョンのとなりでねました。とても気持ちがいいです。

そして、次の日、ジョンの様子が変でした。あんな達はすぐに病院へ行きました。検査をすると先生はこう言いました。

「ジョン君はストレスがたまっているようです。あと何日かでなくなってしまう確率が高いです。」

それを聞くと、あんなはすごく悲しい気持ちになりました。

「ジョン、もう行かないで。」

と思っていました。

そして、次の日、家族みんなが見守る中、ジョンはなくなってしまうしました。あんなは心の中で、

「ごめんね、ジョン。とてもつらかったのにむりに遊んでしまった。」

あんなは何度も何度もジョンに言いました。あんなの

頭の中には、今までのたくさん思い出が浮かび上がってきます。あんなはその思い出の一つ一つを忘れないようにジョンとの思い出を大切にしていこうと心にちかいました。

## にじ色の椿

越喜来小学校五年 村上 優

むかしむかし、大船渡に一人の男が住んでおりました。その男の母親は病氣にかかっていました。ですから、男はたくさん働いて母親にうんと楽をさせようと思っていました。

ある日のこと、その男は仲のよい友達にさそわれ、となり村で仕事をすることにしました。母親を一人にするわけにはいかなかったので、妹に見てもらうことにしました。

となり村につくと、昼飯にしようと思い、うどん屋に寄ることにしました。そこうどん屋の主が話しかけてきました。

「どこから来たんですか。」

「となり村の大船渡です。」

男はそう答えました。するとうどん屋の主が、

「私も大船渡で生まれました。ところで、大船渡には

昔からうわさがあるのをご存じですか。」

と男にたずねました。

「何でしょう。ぜひ聞かせて下さい。」

男はその話に興味津々でした。すると、うどん屋の主が話し始めました。

「大船渡、住田、釜石にまたがっている五葉山は知っていますよね。その五葉山の山頂に、にじ色の椿があるのです。そのにじ色の椿には、食べると死んだ人も生き返らせるほどの力があるんですよ。」

それを聞いた男はおどろいて、

「へー。すごい力を持っていますね。」

と言いました。そこまで言うとうどん屋の主は、

「すみません。店が混んできたので、続きは明日にでも。」

と言いました。

「ありがとうございます。明日また来ます。うどん、とてもおいしかったです。元気が出ました。」

そう言って、仕事場へ向かいました。歩いていると、どこからか、ひそひそ話が聞こえてきました。

「にじ色の椿を取りに行つて死んだ人もいるらしいよ。」

という、ぶつそうな内容でした。男は怖くなりましたが、日がだいぶ高く上がっている事に気づき、急いで仕事場に行きました。仕事を終わると、男は疲れ切つ

た体を引きずるように宿に向かいました。

次の日、仕事を終えて宿に帰る途中、あのうどん屋に寄りました。すると主が寄ってきて、

「待っていましたよ。さっそく話の続きをしますね。」

と言いました。男は、

「お願いします。」

と答えました。主は、

「そのにじ色の椿を取るためには、大船渡の方から上らなければなりません。」

と言いました。男は、

「そういえば昨日、にじ色の椿を取る途中に死んだ人もいると聞いたのですが、どうしてですか。」

とたずねました。すると、

「それは、山頂に大きな獅子や大蛇がいるからです。にじ色の椿を囲んでいるそうですよ。にじ色の椿を取るためには、獅子や大蛇を満足させる必要があるのです。」

話を聞いた男は、だまつて考え込んでいましたが、突然顔を上げ、

「私、登ってみます。一緒に登りませんか。」

と言いました。すると主は、

「いいですよ。明日は店を休みにして、登りましょう。」と答えました。続けて主が、

「私は、五葉山の獅子や大蛇を満足させるためには、それぞれの好物をあげばいいんじゃないかと思うんだ。獅子には鹿の肉、大蛇にはかえるを。」

と言いました。男は、

「それはいい考えですね。私はかえるを捕まえてきます。あなたの店では鹿の肉があつたようですので、それをお願いします。」

と言いました。店の主も賛成しました。そして、翌朝に会うことを約束し、二人は別れました。

いったん、大船渡に戻った男は、母親や妹にそのことを伝えました。母親も妹も心配でたまりませんでした。だが、男の決心は固く、何も言えませんでした。

次の日二人は朝早くから五葉山に登り始めました。大船渡側からの山道は険しく、二人は途中で何度も引き返そうとしたが、お互いに励まし合いながら登り続けました。

赤坂峠近くに来ると、天気もよくなり、見晴らしもよくなってきたので、二人はやる気が出てきました。調子よくどんどん歩いて行くと、ついに山頂に着きました。そこにはうわき通りの大きな獅子と大蛇がいきました。そして、二人は鹿の肉とかえるをあげると、獅子と大蛇は満足してねむってしまいました。そして、二匹がねむっている間に、二人はついに、にじ色の椿

を取ることにできたのです。二人は獅子と大蛇が起きないうちにそつと山を下りることにしました。

家に帰ると、男はさつそくにじ色の椿を油にして母親に飲ませました。すると、母親は肌がつるつるになり、十才くらい若い姿へと変わりました。母親は、

「これでまた、元気に畑仕事ができるよ。ありがとう。」と元気な声で男にお礼を言いました。

今でも、椿油は体によいことで知られています。そして、大船渡市の花が椿だと言うことも広く知られるようになったのです。

### 大船渡っていいところ

越喜来小学校五年 畑野 寧音

青山大通りをわきにそれると、そこがいつもの帰り道。望は不思議な店を見つけた。毎日通っている商店街なのに、気づかなかったのだろうか、それとも新しくできたのか、望がそんなことを考えていると、

「その店、無料で福引きができるんだよ。やってみな。運命のガラガラ。」

と言うおばあさんの声がした。ふり向いて見ると、だれもいなかった。でも、望にはたしかに聞こえた。望は、「運命のガラガラなんてうそくさい。」と思いつつ

も、なぜかやってみたくなった。ガチャガチャ。出た玉の色は金色。望は思わずさげんだ。

「うそ。」

すると、いきなり光が店をうめつくした。望はまぶしくて目を閉じてしまった。

気が付くと望は、寺のような所に立っていた。門には、「運命」と大きく書いてある。すると、

「おめでとうございます。あなたは『運命のガラガラ』で、見事一等を取りました。」

と言う声がして、光とともに羽のはえた少女が現れた。そして、続けて言った。

「私はキュリア。人間の不可能なことを叶える妖精です。」

「妖精。」

望は、ものすごくおどろいた。

「フッフ。千田望さんったら、おどろいてばかりですね。」

「名前まで知っている。」

「だってランドセルに書いてありますもん。」

望がきょとんとしていると、後ろにもう一人。

「キュリア、早くしてくれ。ん、そいつが入れ替わるやつか。」

またまた、望はおどろいた。

「犬がしゃべっている。」

「かれはジェビーさん。あなたと入れ替わる相手ですよ。ちなみに今は、ゆう体離脱しているので、犬の言葉が人間に分かるのです。」

「ゆう体離脱？入れ替わる？どういうこと？」

「あなた達は一等賞を取りましたよね。その一等賞は、一週間入れ替わり賞というものです。つまり千田さんはジェビーさん、ジェビーさんは千田さんになるということです。」

「ぼくが犬に。いやだよ、犬なんて。」

「おれだっていやだよ。人間になるなんて。」

二人の言い争いもキュリアは無視して、

「これからジェビーさんは渋谷へ、千田さんは大船渡へ行きますよ。」

「大船渡ってたしか・・・。」

「さあ、行きますよ。」

キュリアは光を作り、望とジェビーは光の中へと消えた。

気が付くと、望は古くさい部屋にいた。手を見てみると肉球がある。入れ替わりに成功したようだ。

たたみ部屋で、せん風機がある。洋風の望の部屋とは大違いだ。すると、足音が聞こえてきた。その足音は部屋に近づき、ドアを開けた。

「ジェビー、散歩するぞ。」

望はちよつとがっかりした。それは、飼い主が早芽という男の子だったからだ。犬にされたことも面白くないのに、飼い主ぐらい女の子がいいなと思っていたのである。

「ジェビー、散歩行かないの？」

飼い主の男の子が不思議そうにしていたので、あわてて男の子に近づいた。

「おかしいなあ。いつもクールなお前も、散歩のときはしゃぐのに。変だなあ・・・。」

それはそうだろう。だってジェビーじゃないのだから、と思いながら望は家を出た。

散歩道もほとんど何もない。ただ、『サイコー商店街』というのがあるだけだった。「ああ、だから田舎はいやなんだよ。家は古いし、何もない。あんな福引き当たらなきゃよかった。」そう思いながら仕方なく散歩をしていた。

散歩を終えた後、部屋にもどった望は、ヘトヘトだった。長い距離を休まず歩いたので、足がガクガクになった。ケージにある水を飲もうとしたとたん、窓がゴンゴンと鳴った。見てみると、キュリアが窓を開けた。そして、質問した。

「どうでしたか、田舎の散歩は。」

「つまらなかった。」

望は正直に答えた。

「まあ、初日だからね。そう言っていられるのも今のうちですよ、フフフ。」

「どういうこと。」

望には、この言葉の意味はわからなかった。

こんな感じで、初日は終了した。何も変わったことはなく、田舎はやはりつまらないなということを感じただけであった。

特に何もなく、数日が過ぎた。いつも通り茶の間へ行くと、早芽の母親が、

「ジェビー、買い物に出かけるわよ。」

と言った。ここへ来て初めての買い物である。田舎の店は、いいところはないと思うが、ちよつとだけ興味はあった。買い物に来了店は魚屋だった。すると母親が言った。

「早芽、ジェビーといっしょにさんま買ってきちゃうだい。」

「はいはい。行こう、ジェビー。」

早芽は望に声をかけた。

「おじさん、さんまちょうだい。」

「はいよ。ちよつと待っててね。」

のりのいい魚屋のおじさんは、さんまともう一つ、紙

のようなものをくれた。その紙には、さんまと椿の花がかいてあり、それがきれいな色でぬられていた。そのとなりに、「さんまおいしいよ！」とか「塩焼きにするといいよ！」などと書かれていた。早芽は、「あつ。ぼくたちが書いたさんまレターだ。」と大喜びで声をあげた。

「お！君の学校で書いてくれたのか。ありがとう。このカードのおかげで、さんまがたくさん売れるし、このカードをもらったお客さんがすごく喜んでくれるんだよ。つまり、カードがあればお客さんに二倍喜んでもらえるんだ。」

地元の特産を市内の小学生も応援しているということが、望にとってはとても新鮮で、都会でもまねしてみたいなと思った。もちろん、おいしいさんまだけでもうれしいが、そこにおまけが付いてくれるともっとうれしい。望の中に、もしかして田舎って意外といい所なのかもしれない、という気持ちが芽生えてきた。

「ジェビー、帰るぞ。」

早芽がさんまの入ったパックを持って、帰ろうとしていた。望は、あわてて早芽について行った。

この一週間も残り二日となっていた。望は目が覚めると、なぜか車の中にいた。

「目が覚めたね、ジェビー。急なんだけど、今日は暑

いから、浪板海岸に行くことになったんだ。急でごめんね。」

望は、この家族はいつも急に出かけるなあと考えた。今日の気温は三十度。絶好の海水浴日和だ。

浪板海岸に着くと、望は思いつき水遊びをした。毛がちよっとじゃまだったけれど、すき通る海水がとても気持ちよかった。でも、少しでも気になることがあった。それは大人がいない、子どもだけで遊んでいるグループがいたことだ。早芽の母も、

「あのグループ大丈夫かしら。」

とつぶやいていた。すると、次のしゅん間、三人のうち一人が海に消えた。他の仲間が、

「大変だ。吾郎がおぼれた。」

と言って助けを求めている。

「救急車。」

「何か浮くものはないか。」

いつせいに人が集まった。電話をかけたなり、声をかけたりした。全員が必死でおぼれている人を助けようとしていた。

望も何かできないかと辺りを見回し、

「ワン、ワン、ワン。」

と必死でほえた。

「どうしたジェビー。あつ、浮き輪か。よしつ、今浮



き輪を投げるから、それにつかまって。」

早芽の父は浮き輪を投げると、おぼれている子はそれにつかまり、ラッコのように浮いた状態になった。すぐに大人が助けに入り、砂浜へと引き上げた。同時に、救急車が来て、その子は無事病院へ運ばれた。その場にいた全員が協力し合って助けようとしていた。おぼれた子が無事だと分かったとき、みんな安心したように笑っていた。その空間がとても温かった。そして、望の心は熱く燃えた。

その日の夜、キュリアがいきなり、

「急きよ、今日で入れ替わり体験を終わりにします。急ですみません。」

いきなりでびつくりしたけれど、その理由は望には分かっていた。

「ねえ、最初からねらってぼくのことを入れ替わりさせたんでしょ。ジェビーも。」

キュリアはほえむだけだった。望は続けた。

「それしか考えられないんだよ。田舎ぎらいだったばかりと、きつと都会ぎらいだったジェビーをねらってやったんでしょ。」

「はい。私は二人に大船渡も都会もいい所だということを知ってほしかったんです。」

「やっぱりね。でもありがとう。これでぼくは夢を見

つけられた。大人になったら、きつと大船渡に行くよ。そしてぼくにできる何かをしてみようと思う。」

キュリアはにっこり笑い、

「さよなら千田さん。がんばってね。」

と言った。ぼくは光に包み込まれた。

気がつくとき、ぼくは千田望になっていた。望はこの六日間のこととは絶対に忘れることはないと思った。再び大船渡を訪れるその日まで。

春をとりもどしに

越喜来小学校六年 大久保 心晴

春香は、越喜来という町に住む十一歳の女の子。今日は春香の誕生日の前日だ。

春とは思えない寒さが残る中、春香は眠そうに起きてくると、お母さんが不安そうに窓の外をながめていた。春香は不安に思って、

「お母さん、おはよう。どうしたの。」

と聞くと、お母さんは、

「おはよう。春香。」

と春香とは目を合わせないように答えた。続けてお母さんが、

「春香、今年はなぜか桜の花も咲かないし、気温も低

いし、まるで春が来ないみたいなの。だから、もしかすると今年は誕生日のお花見ができないかもしれないわ。ごめんね。毎年すごく楽しみにしているのに。」と申し訳なさそうに言った。春香はその話を聞いたとたん、泣きそうになるほど悲しかったが、お母さんを励ますように、

「大丈夫だよ。お母さんのせいじゃないよ。」と優しく言った。

しばらくしてからお母さんにお使いを頼まれたので、春香はお使いに行った。買い物を終えた春香は、にんじんとカレールウとジャガイモの入ったふくろを持つてとぼとぼ歩きながら考えた。そして、夏虫山に向かった。もしかすると桜が咲いているかもしれないと思ったからだ。

しばらく歩くとあの大きな桜の木があった。でも、やっぱり花は咲いていなくて、春香は思わず涙を流した。すると、どこからか少しにこったハープの音が聞こえてきた。春香がびっくりして辺りを何度も見渡している、少し離れた場所に、小さな木の家があった。「あんな所に家があったかな。」と少し気味の悪い感じもしたけれど、春香は、思い切ってそこに行ってみることにした。

春香は、「一体誰がこんなところでハープを弾いて

いるのかなあ。」と不思議に思った。家の前まで来て、春香はちよつときどきししながらも、木の家のドアをノックした。すると、中からとってもかわいらしい、春香と同じくらいの子が出てきて、

「あなたは誰。私に何かご用。」

と優しい声でたずねてきた。春香は、

「も、森の中を、散歩していたらハープの音が聞こえてきて、その・・・。ごめんなさい。いきなり来られてもいやですよ。」

とあたふたしながら言った。すると女の子はにこにこしながら、

「そんなことないわ。こんな森の中でハープの音が聞こえたら変よね。さあ、上がって。」

と言った。その女の子の家には、小さな机といすがあり、紅茶とクッキーが置かれていた。

「どうしてこんなところでハープを弾いていたの。」

と聞くと、女の子は少しだまってから、

「私は春の妖精で、毎年このハープを弾くことで春が来るの。でも、ハープにひびが入ってしまつて・・・、にこった音しか出なくなつたの。何度音を出しても、きれいな音が出なくて。春が来ない原因はきっとこのハープのにこった音なんだわ。だから私が何とかしなきゃって思っているんだけど。」

と悲しそうに言った。春香はびっくりして言葉が出なくなつた。でも、春香は何か方法があるんじゃないかと思つて一生懸命考えた。ふと春香はクラスの友達と言つていた「この夏虫山には、花咲き神社という古い神社があつて、その神社には、壊れた物を直してくれる神様がいらっしゃるよ。」と言つていたことを思い出した。春香がそのことを妖精に教えると、春の妖精は目を輝かせて、

「その神社を探してみたいわ。一緒に探して。」

と春香にお願いした。そこで明日、ちょうど春香の誕生日に、二人は神社を探しに行くことにした。春香は、春の妖精にさよならを告げると、あるところへ向かつた。

春香がやつてきたのは、越喜来の古い図書館だつた。

この図書館には地域に伝わる古文書や古い地図があることを春香は知っていたからだ。春香はさっそく「越喜来の地図」という地図帳で神社がどこにあるのかを調べて、地図を持っていたレシートの裏に書き写した。

次の日の朝、春香はお母さんに「友達と遊ぶ。」とうそをついて大きな桜の木の下へ向かつて行つた。春香が桜の木の下につくと、もう春の妖精が来ていた。春香は春の妖精に、

「おはよう。今日は必ず花咲き神社を見つけようね。」

と言われて、手をぎゅっと握られた。春香は、

「うん。」

と元氣よく答えた。そして、二人は地図を見ながら深い森の中へ入つていった。

二時間近くも歩いただろうか、歩くのもだいぶ疲れてきたころ、どこからか

「誰か助けて。痛いよう。」

と言う苦しそうな声が頭の上から聞こえてきた。辺りの木を見上げてみると、小さなりすが動けずに泣いていた。しかも、けがをしているようだ。春香はりすを助けたいと思つたが、どうやって助ければよいか分からなかつた。あたふたしていると、春の妖精が、

「春香ちゃん。あそこにある倒れている木をはしごにすれば降りられるんじゃない。」

と言つた。さっそく二人は、倒れている木を持ち上げようとしたが木は動かなかった。すると、近くにいたりすの親子が手伝い、はしごをかけることができ、なんとか助け出すことができた。春香はいざというときのために持ってきた包帯をりすの足に巻いてあげた。りす達は、

「本当にありがとう。ありがとう。」

と何度も言つてくれた。すると、お父さんっぽい大きなりすに、

「君達、これからどこに行くのかね。」

と聞かれ、春香と春の妖精は花咲き神社に行くことを伝えた。その話を聞くとお父さんっぽいすが、桜色のきれいな石を春香に渡して、

「あそこに行くためには、大きなつり橋を渡らないといけない。もしも危ないと思ったらこの石に「助けて」と言ってみよう。」

と教えてくれた。二人はりす達に、「ありがとう。」とお礼を言ってみようかと石を握りしめて森の奥へと進んで行った。

それからまたしばらく歩いたところで、急に霧が濃くなって森の雰囲気が変わってきた。時間がたつにつれて、だんだん目が慣れてきて、つり橋が見えてきた。二人は想像以上の高さにすごくおどろいた。その橋は、風が吹くとギーンと音を立てて、大きくぐらぐらとゆれた。それを見て春香が、

「あたし、高いところいやだなあ。」

とつぶやくと春の妖精がにこっと笑って、

「大丈夫だから。ゆっくり、慎重に春香ちゃんのペースで行こう。」

と言って手をにぎり励ましてくれた。春香は妖精の手に春のような暖かさを感じると、何だか渡る勇氣が出てきた。そして、思い切って渡り始めた。ところが、

一歩進むたびに、ぐらぐらして下に落ちそうになる。春香に恐怖がよみがえってきた。そして、五歩目を踏み出そうとしたときに春香の足がすべって下に落ちてしまった。

「春香ちゃん。」

と春の妖精がさげんだ。春の妖精は、数秒が長い時間に感じた。すると、

「おい。」

という声が聞こえてきて、春の妖精が後ろを振り返ると、なんと春香が大きなわしの上に乗って手を振っていた。春香は、落ちていくときにあの石に助けを求めた。すると、どこからともなく、大きなわしが現れ、春香を背中に乗せて助けてくれたのだ。あの石のおかげで、春香は無事だった。そして、春の妖精もわしの背中に乗り、神社へ向かった。

わしは、二人を神社の前まで連れて行ってくれた。

二人はわしに手を振って、

「ありがとう。」

と大きな声でさげんだ。

花咲き神社に着いた二人は、神社で

「ハーブが直りますように。」

と一生懸命お願いすると、神社の中から、

「この紙に書いてあるじゅ文を壊れている物に三回す

らすら言えたら直るぞ。」

と言う神様の声が聞こえてきた。いつの間にか春香の手には神様がくれた紙が握りしめてあった。春香と春の妖精は、

「ありがとうございます。」

と言って、急いで神社をあとにした。

橋の近くまで戻るとわしが待っていてくれたので、わしに乗って二人は大きな桜の木の所へ向かった。

春香と春の妖精が桜の木の下で神様がくれた紙を見てみると、「キナミデラキゼルツイタニ」と書かれてあった。春の妖精は、ハープを持ってくると、ゆつくりと深呼吸をしてそのじゅ文を三回すらすら唱えた。すると、ハープに入っていたひびの部分がり出して、だんだんひびが入っていたところが光りだし、元の光り輝くハープに戻った。

春の妖精が、明るい調子の春らしい曲でハープを弾き始めると、足下の花が満開になった。するとすぐに、優しい春風も吹き始めた。森の中はいつの間にか、花や草で満ちあふれ、春の香りでいっぱいになった。春香が笑顔で、

「よかったね。春が無事に来て嬉しいね。」

と言って春の妖精を見ると、妖精の体が透けていた。春香がびっくりしていると、春の妖精が、

「私は、春になれば消えちゃうの。春香ちゃんと冒険ができて楽しかったよ。」

と言って消えてしまった。そして、春香が、

「私もすごく楽しかったよ。これで、今年もお花見ができるよ。私にとって、とってもすてきな誕生日プレゼントだよ。」

そう言って春香は春の空気を思いっきり吸い込んだ。

## 《中学生部門》

大船渡に迷いこんだ少年

日頃市中学校一年 佐藤 優月

ザブン、ザブン、波の音。ここはどこだろう。背伸びして、起き上がり、ゆつくりと甲板に出て辺りをみると、漁船が並んでいた。

そういえば、ゆうべのことだ。親に、「きちんと勉強しなさい。遊んでばかりいないで。」とおこられて、マルは、腹が立って塾に行くふりをし、家出だ。父島からの出発だ。

マルが乗った船は、きれいで色あざやかな青色の船。マルが乗ってから一時間後、雨と風と雷が激しくなった。マルは、真つ黒な船の底で、おびえながらも、ね

むりについた。そして翌朝、ついたところは、見たこともない大船渡の港だった。

そこに一人の少女がゆつくりと近づいて来た。麦わら帽子をかぶり、釣りざおを持っている。

「あなた、だれ？どこから来たの？」

「僕は、マル。東京から来た。」

「私は、ミク。これから、さんま釣りするの。あなたもやる？」

「うん。」

と言って二人並んでやった。マルとミクは、おじいちゃんやんが運転する船に乗って、海の奥へと行った。さんま釣りはやったことがないから分からない。それに、さんまを食べたことがない。釣り方を教わったができない。

ミクが釣りながら、こう言った。

「今日はやめて、明日にしよう。今から私の家に行つて、お話ししよう。」

「分かった。」

と言って、自転車で帰った。

ミクの家は、末崎町だ。家のすぐそばには、松林が数キロに渡り生い茂っている。海鳴りの音も聞こえる。

マルは、考えた。どうして、大船渡に居たのだろうか。夏休みに入ったので友達とばかり、遊んでいた…。

昼、さんま釣りをした。なんとか一匹釣れた。すると、ミクが、「うまいね。」とほめてくれた。ミクのおじいちゃんが、「ミク、おつかい行ってきた。」と頼まれたので、ミクとマルは、BRTで、いっしょに行った。ついたところは、キャッセンだった。スーパーマーケットなど、飲食店や、本屋などの商店街があった。ここは、津波で街が流され、新しく出来た街「キャッセン」だ。大船渡の人達が復興のシンボルだと思っている街だ。

おじいちゃんに頼まれた物はくしと塩。さんまを塩焼きにするために頼まれたのだ。ショッピングセンター「マイヤ」でくし十本で一束になっているのを二つと、塩一袋買った。

次に行ったところは、リアスホールだ。図書館で、ミクが本を貸りようとしていた。マルは、「こんな立派な図書館があるんだ。」と不思議そうに見た。本がたくさん並んでいた。

ミクが手にとって読んでいたものは、「にんたま乱太郎」だった。

図書館をあとにして行ったのは、碁石海岸だ。そこでミクとマルは、コンクリートのところに座り、お話しをした。

「私ね、おばあちゃんと、おじいちゃんと妹しかない

いの。」

「なんで？」

「お父さんとお母さんは、仕事で、私と妹は保育園に行ってた。それで、お母さんとお父さんは、いないの。津波にのみこまれて、私は悔しくて、一日中泣いたよ。」と言った。

すると、マルのお父さん、お母さんが、マルの頭の中でよみがえった。少し、さびしく感じた。

翌朝、ミクが熱で休んだ。マルが、

「大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。」

と苦しそうに言った。一人でさんま釣りをしていると、見知らぬ人がこちらへ向かってきた。そしてその人は話しかけた。

「どなたかしら？」

「僕は、マルと言います。」

「あの、道を教えてくれますか？」

「はい。」

「仮設住宅を知ってます。」

「はい。」

その人は、仮設住宅に行ってから、ミクの家に行った。その人は、ミクのおばあちゃんだった。ミクのおばあちゃんは一ヶ月に一度しか来ない。宮古に住んでいる

からだ。

「ミクちゃん、これ飲んで。」

ミクにあげたのは、しょうがスープだ。マルは飲んだことが一度もない。すると、

「まあ、よくなったよ。」

熱を計ってみると、熱が下がっていったのだ。

次の日の朝、ミクは、熱は下がったが、まだおさまらなかった。マルは、勇気をふりしぼって聞いてみた。

「あのさ、ミクは、なんで、お父さんとお母さんいないの？」

「お父さん、お母さん、東日本大震災で流されたの。」

「いつ？」

「二十十一年三月十一日、午後二時四十六分震度七の地震が来たの。」

「僕は体験したことが無いんだ。」

「その時は、小学校に入る前だったけどね。」

「ふーん。」

マルは、なんでだろうと思った。

翌日、ミクの熱がおさまった。次の日から、ミクは中学校に行くことになった。マルが、きたのは、七月上旬だからだ。ミクがいたときは、夏休みだったからだ。碓石海岸に行くと、考え事をした。マルが、もともと住んでいるところは六本木だ。それなのに・・・。

その時、ミクが、学校から帰ってきた。そう、今日は、部活が無いんだと思う。ミクが聞いた。

「何してんの？。」

「さんま釣りしてた。」

「そう。今日、夏祭りなの。行く？。」

「いいけど。」

そして、花火大会に行った。赤色と緑色の花火がどどんと舞い上がった。大勢の人が、かき氷や、わたあめなどの屋台へ並んでいた。その途中、おおふなトンに会った。かわいくて、マルにとっては、初めてだったし、うれしかった。

次の日、ミクといっしょにさんま釣りをしながらしやべった。

「家出したの？。」

「そうみたい。」

「なんで？。」

「遊んでばかりいたから？。」

「帰ったほうがいいよ。親、心配しているよ。」

「じゃ、帰る。」

と言って帰ることになった。

「じゃあね。」

と言って夕日のように帰っていった。マルが帰ると親が心配して言った。

「心配したんだから、どこ行ってたの？。」

「大船渡。」

「なんで？。」

「家出。」

「もう、何したの？。」

「友達ができたことと、商店街や、夏祭り、おおふなトンにもあった。」

「おおふなトン？。」

「おおふなトンは、胸には、黄金のさんま、頭には、椿の花なんだって。」

「へー、大船渡に住む？。」

「うん、住みたい。」

といって、大船渡に住むことになった。

## 石田三朗と五朗

吉浜中学校一年 高橋 真実

ここは、海と山に囲まれたのどかな町『大船渡』です。漁業や農業が盛んです。この大船渡にある吉浜という所には、つなみ石という石があります。このつなみ石は、明治大津波や東日本大震災で運ばれた大きな石です。このつなみ石について学ぶために吉浜でつなみ石を研究している人がいました。



「やっぱりいい石だ。」

この人は、つなみ石について研究して十四年。まだ研究者の中では若く、経験も浅く、まだまだこれからではありますが、この人が初めてつなみ石と出会った時の物語です。

「大きな石だなあ。あと強い。」

「おーい。みんなちよつと来て。」

「わー。」

「でか！」

「すごいね。」

少しうれしそうな顔をしていた五朗。

五朗というのは、みんなを呼んだ人。後のつなみ石の研究をしている人、五朗は、自分の石のように紹介した。

「この石はな、明治大津波で運ばれて来たんだ。すごいよね。」

「ああ、このことか。今、話題になっていた『つなみ石』って。」

五朗は、自分が一番初めに見つけたと思っていたから、残念そうだ。こんな五朗を見て、みんなは、

「ごめん、用事ある。帰ってもいい？」

「う、うん。」

みんな帰ってしまった。

「気にしなくてもいい。」

後から、低い声がした。

「どなた様ですか。」

五朗は、不思議そうに言った。

「だーれだ。」

五朗は、少し遊ばれているようだった。

「まだ、帰ってなかったのかよ。」

うれしそうに五朗は言いました。五朗は、完全に仲間達が言っていると思っていました。

だが、

「何言ってるんの、オレだよ、オレ。」

五朗は、ふと思った。

「えっ、つなみ石がしゃべってるの？」

「正解。」

「きやー」。えっ、うそでしょ。マジ？」

「うん。あつ、内緒だよ。」

「あ、ああ。」

五朗は、うれしい気持ちと少しの緊張がありました。

五朗は、昔から人に話しかけれなくて、相手から話しかけられないと仲良くなれませんでした。

「まあ、オレも昔はそうだった。でもね、津波でここまで来てさ、みんなとはなればなれになって、あの時、もっと話しをしておけばよかったと思うことがあるん

だ。だから、ここまで来ていろいろな仲間を増やそう  
ってわけだ。人と話したのは、五郎だけだから。」

「ありがとう。がんばってみる。ていうか、なんで思  
っていることが分かるの？ボクの名前分かるの？」

「だから、オレも昔はそうだったから。」

納得してスッキリした五郎は、色々な事を調べたい  
と思いました。勉強が得意で、将来の夢は何かを研究  
する仕事につくこと。だから、つなみ石について調べ  
てみようと思えました。さっそく調べると、

「吉浜は、東日本大震災で『奇跡の集落』と呼ばれま  
した。このことは、漁業には少し不便だけれど、高台  
へ住むことを吉浜に伝えた偉人の言葉にみんなが納得  
し、とった行動は、大きな石であっても流してしまう  
ことから津波がどれだけ恐ろしいか分かります。」

という記事を見つけた五郎。つなみ石の所へ行って、  
この記事のことを伝えると、

「五郎、これからも吉浜をずっと、ずーっと守ってい  
つてくれないか。」

と言われました。

「どういうこと？」

五郎は、吉浜の家は、高台にあることが当たり前だ  
と思っていました。

「吉浜には、これからたくさんの人が来る。その人達

は、高台に住むという教えを知らない人もいるからな。」

昔から伝えられている事を自分が伝えていけるか心  
配していた時、

「おい、五郎。この前は、ごめんな。」

「みんなー、待ってたよ。あのさー、津波の怖さをみ  
んなに伝えないか？」

「どうしたの、急に。」

「つなみ石が・・・あっ、つなみ石について調べたら、  
津波の怖さを改めて知ったんだ。」

「そうだ。ボくらって今、学級新聞作っているじゃん。

それでさー、書くことなくて悩んでたんだ。せっかく  
だしやってみようよ。」

こうして五郎達一年C組は、津波の恐ろしさを学級  
新聞に書くことにしました。新聞係は、津波に関わる  
情報を調べました。

そして、五郎はつなみ石に津波について聞いてみま  
した。

そして、一週間後、

「出来た——。」

「五郎ありがと——。」

ついに学級新聞が完成しました。あつという間に、  
たくさんの人が集まってきました。

そして、職員室では、

「先生のクラス、すごいですね。子供達がまさか、あんなすごい新聞を作るなんて、びっくりしました。」

「ありがとうございます。みんなに言っておきます。」

「ところで、文化祭で何を発表しますか？」

「せっかくだから、つなみ石や津波についての演劇しませんか。」

「そうですね。考えておきます。」

こうして、今年の文化祭の演劇は、津波についての演劇になりました。

先生がみんなに、

「今年の文化祭は『津波』についての演劇をやることにします。」

と言いました。

五朗は、放課後につなみ石の所へ行き、学級新聞のことと文化祭の演劇のことを話しました。すると、つなみ石は、

「良かったなあ。しっかり伝えてくれよ。」

と言いました。五朗には、つなみ石が少し泣いているように見えました。

「泣いてるの？」

「違うよ。感動しているんだ。五朗がここまで伝えたがっていたと知って・・・。」

「えっ。」

「まだ、中学生の五朗が、オレと会ってからまだ少ししかたつてないのに、津波の恐ろしさを本気で伝えたがっていることが嬉しくて、五朗に声をかけて良かったと思つてさ。」

「ボク、絶対に成功させてみせるから。」

次の日、配役が決まり、練習が始まりました。先生に

「五朗、ちょっと来て。」

と言われました。少し緊張しながら先生の所に行きました。

「五朗、お前がこうした方がいいと思った所は、どんな言つてね。」

と頼まれました。五朗は責任感が強く、みんなから信頼されていました。先生は、そのことを知っていたのです。急に言われた五朗はどうすればいいのかわかりませんでした。

こうして今日も学校が終わり、つなみ石のところへ行きました。

「ねえ、どうしよう。今日先生に、直した方がいい所をボクが言えって言われたんだ。どうしたらいいかなあ。」

「五朗の思っているようにしたらいいと思う。五朗が伝えたい事を伝えられると思う方法だったら、それで

いいんだ。」

この言葉は、五朗に一番勇気をくれました。演劇は、練習するほど上手になっていきました。先生は、遠くから見守っていました。みんながセリフを完ぺきに覚え、本番が近づいて来ました。本番が近いのに、みんなは緊張していません。でも、五朗は違いました。

そして、本番の前日。中には、少し緊張している人もいました。最後の練習は、今までにないくらいすばらしい出来でした。最後に先生が「五朗から。」と言いました。五朗は、元気よく返事をしてみんなに話し始めました。

「今までやってきたことは、全て明日のためにやってきました。そして、このことは、見る人に津波の恐しさ、高台に暮らすことの大切さを伝えるための作品です。思い切って本番に挑みましょう。」

といい、あいさつを終えました。

いよいよ本番、たくさんの人が見ている。でも、スポットライトで何も見えない。

演劇が始まりました。「直っている」――五朗がたくさん指摘したところを、みんなが覚えているか不安でした。

演劇は無事に終了。会場は拍手に包まれました。ステージ裏で行われた反省会では、

「津波の恐ろしさが分かった。このことをずっと伝えていけるようにしたい。」

などの意見が出されました。終わった後、

「五朗はやっぱりすげーな。格好よかったぞ。」と多くの人にほめられました。そして、母に、

「いい劇だったわね。」

と言われました。

つなみ石の所へ行つて、五朗は、大成功だったと伝えました。五朗は、本当につなみ石に感謝していました。つなみ石は、

「五朗のおかげで、オレも勇気を出せた。ありがとう。」と言いました。

それから五朗は、津波の恐ろしさとつなみ石について研究し続けています。

「つなみ石って石田三朗っていう名前なの？」

「うん。」

「え―――。」

## 《高校生部門》

### 偽りの言葉

大船渡高校一年 菅野 美月

「待ってー」

病室から外を眺めていると声が聞こえた。

「もー、遅いよ。早く来ないと置いてっちゃうからね」  
どうやら二人の女の子達が追いかけてっこをしているようだ。

彼女達はきつと私と同じぐらいの年。でも、私と違ってなんだか幸せそう。

いいな、あんなに走れる足があつて。

いいな、一緒に遊ぶ友達がいる。

わがままなのは自分でも分かっている。でも、どうしても受け入れられない。もう、足が動かないなんて。

お医者さんとママがときどき私の病気の話をしているけど、何を言っているのか全然分からない。ただ分かるのはもう私の足が動くことはないということ。そして、普通の子みたいな生活をするのは無理なこと。

お医者さんもパパもママも5歳上のお兄ちゃんもいつも「大丈夫だよ」って私に言って笑顔を見せる。私

もその言葉を聞くとホッとするし、気持ちが悪く落ち着いた。

でも、ときどき怖くなる。これから、私はどうやって生きていけばいい？何を信じればいいのか？

「誕生日、おめでとう。美雨。」

ある日、お兄ちゃんが私にそう、言ってきた。

「からかわないで、お兄ちゃん。私の誕生日は今日じゃない。もっと先よ。」

「いや、今日で合ってる。ほらプレゼントだ。ちゃんと大切にするんだぞ。」

お兄ちゃんから渡されたのは青い目をした可愛らしい人形。髪がクルクルしていて、天使のような微笑みを浮かべている。

その人形から目が離せなかったけど、今、一番気になるのはお兄ちゃんのこと。お兄ちゃんはいつも優しく何でもできる自慢のお兄ちゃん。だからこそ、私の誕生日を間違えるなんて絶対にあり得ない。きつと、何かあったんだ。悩みがあるなら聞いてあげなくては。そう思い、お兄ちゃんの方へ再び視線をやると、

「あれ？え？」

そこには誰もいなかった。

最初、もう部屋を出たのかもしれないと思ったけど

それはおかしい。だって私はドアの開いた音と閉まる音を聞いていないのだ。

こういう時に足さえ動いていれば確認できたのに……。もう、私にはどうすることもできない。お兄ちゃんにこれから一生会えなかったらどうしよう。不安だけが私の心を埋め尽くす。

「うっ……うっ、ぐす」

涙がこぼれ落ちる。

一人は嫌だ。もう、何も失いたくない。

ずっと隠していた本音。誰にも言えなかった私の気持ち。誰かに気づいて欲しかった。

『……私は知っている』

「え？」

『あなたの悲しみを知っている。』

声のする方を見るとそこにはお兄ちゃんがくれた人形がいた。最初は空耳かとも思ったけど、

『私の名前はメリー。あなたは？』

本当にしゃべってる……。でもなんだか不思議と怖くないな。

「私は美雨。メリー、よろしくね。」

『よろしく。』

どうしよう、友達ができたみたい！私はわくわくしていた。友達とお話するのが夢だったから……。

「ねえ、メリー。お話ししましょう。」

『お話？分かった、いいわ。』

「まず、メリーはどうしてしゃべれるの？」

正直、メリーがいてくれて嬉しいけど人形は普通しゃべることはない。それくらい私にだって理解できる。だから、単純に知リたかった。

『……それは答えられない。』

「え？ど、どうして？」

『いずれ分かるはずだから。それよりどうして泣いたの？』

「そ、それは……なんか怖くなって。」

誰にも言えなかったのに……。私の口は何かの呪いにかかったように動き出す。

「それで、それで、ぐすつきみ、しくて」

また、涙があふれてくる。メリーは何も言わずそつと泣き止むのを待ってくれているようだった。その優しさがすごく嬉しくて余計に涙が止まらなくなった。

「ありがとう、メリー。気が楽になったわ。」

『役に立ったなら良かった。あまり一人で抱え込まない方が良くと思う。』

「そう、だね。ありがとう。」

私にはこんな風に言ってくれる友達がいる。友達が、

できた。その事実にもまた泣きそうになる。

『……ねえ。』

しばらくの沈黙の後、メリーが声を上げた。それは平べったくて、感情のないような声だった。メリーの雰囲気が一気変わったのが分かる。

「な、何？」

『君はこの世界が嫌い？』

メリーは海のような深い青色の目を真っ直ぐ私に向け、そう問いかける。

「……」

何も答えることができない。いや、この場合どう答えるのが正解か分からないんだ。

メリーは私が悩んでいる間も急かすようにじっと見つめてくる。

「嫌いだよ。」

気づいた時には口が勝手に動いていた。

自分の意志では決していない。まだ、自分の答えさえ、出でないのに……。私の口は言う事を聞いてくれなかった。

その言葉を聞いたメリーは安心したようにこう言う。

『それなら、魔法をかけてあげましょう。』

それは聞いたことがあるような優しい声だった。明るい光に包まれ、地面がだんだん遠くなっていく。

どこに向かっていているのかも分からないけど、恐怖よりも期待と興奮が勝る。

光が消えていき、目を開けるとそこにはたくさんの人形が並んでいた。

数えきれない程の人形だけど同じものが一つもない。そのことに少しの感動を覚え、私はある一つの人形を持ち上げようとした、その時。

「おやおや、これまた可愛らしいお客さんだ。」

少し低く、格好つけたような声。

「こんなところで何をしているんだい？」

振り向くとピエロの仮面をかぶったスーツ姿の男の人が立っていた。笑っているようにも泣いているようにも見えるピエロは彼の独特な雰囲気合っている。でも、どうしてピエロなんだろう？何か意味があるのかな？

「どうしたんだいお嬢さん？そんなに黙りこくって。眉間に皺が寄ってるし……可愛い顔が台無しだ。」

その言葉で彼が誰なのかとか、ここがどこなのかとか、その他もろもろがどうでも良くなった。それくらい、彼の話し方は独特なのだ。

中々、返事を返さない私を不思議に思ったのかそれともじっと彼を見つめる私の視線に耐えられなかったのか。どっちでもいいけど彼は確かにこう言った。

「えっと、僕の顔に何か付いてる？」

「……」

「またもや沈黙で返すことになってしまった。何かつて……。そもそも、ピエロの仮面で素顔は見れないんだけど。」

「私が思ったことがやっと分かったように彼は苦い顔をした。」

「ゴホン、えーと、今のはなかったことしよう。そう、それが良い。」

「……ねえ、どうしてあなたはピエロなの？」

「開き直ろうとしていた彼に私は聞いた。」

「ピエロか……。そんなに深い意味はないよ。」

「意外な答えだ。何だかピエロは彼に似合っているようにも似合っていない様にも見えた。だからきつとピエロは彼の中の特別なものだと自然とそう思っていた。」

「なんでもかんでも理由を求めてはいけない。そう、今ここに君がいることとか、メリーがお話しできることとかね。」

「メリー！そうだった、ねえ、メリーはどこ？」

「くくっ、まだ会って間もないのにもうそんなに仲良くなったのかい？良いよ、僕の質問に答えられたらメリーの場所を教えてあげる。」

彼は意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「……分かったわ。」

「そうこなくちゃね。じゃあ、改めて僕の名はそうだな……。ライアー！ライアー！ライアー！でも呼んでくれ。さあ、さっそく本題に入ろう。まずはこれを見てくれ。」

ライアーが指を鳴らすと同時に大きなスクリーンが

現れた。色々なことが一気に起こったから耐性がついてきたのかも、何が起こっても私は驚かない。

【もー、遅いよ。早く来ないと置いてっちゃうからね。】

これって……。私が見かけた……。

【ねえ、待ってたら。】

先にいく女の子はどうやら走るのが遅い彼女をからかっているようだ。止まる気配はない。

【どうして待ってくれないの？】

彼女が止まったのは道路のど真ん中。もう、走る気力さえ、残ってはいない。

キッキー

【危ない！】

人の叫びと大きなブレーキ音。暫くの間それらは続いていったが、だんだんと消えていった。

【ぐすっ、うっ、うっ】

暗闇に残るのは一人の女の子のすすり泣き。



【私が、ぐすつ、私があんな意地悪しなければ……。大切な、友達だったのに……。】

そこで画面は途切れ、一面砂嵐となった。

「質問です。この場合、一番悪いのはだ〜れだ。理由もお答えください。」

空気を無視するようなライアーの明るい声が響き渡る。

「ねえ、あの子達は本当に……。」

「あー、駄目駄目。僕の質問に答えてからそういうことは言つてよ。」

一方的な言い分に少しは何か言つてやりたかったが、あれを見た後に言い返す気力なんて私は持ち合わせていなかった。

それにしても悪いのって……。あまりにもはっきりしない言い方だ。この場合、悪いのは誰か一人ではない。

足が遅かった女の子はなぜか横断歩道の所で立ち止まった。体力の限界だったのかもしれないが、流石に場所を考えて気を付けた方が良かったと思う。それが彼女の悪。

先に行ってしまった女の子はあんな意地悪をするべきではなかった。でも、今一番苦しんでいるのは彼女だと思う。一番後悔している。だから、何とも言えない。

い。

悪いのは誰か……。本当に難しい。

「もうすぐタイムリミットだよ。早く答えないとメリーには会わせない。」

「そんな……」

どうしよう……。焦れば焦るほど考えがまとままない。そんな時。いつかお兄ちゃんが言っていた言葉が頭の中をよぎる。

「この世に悪くない人なんかいない。だって人は必ず嘘を吐くから。良い嘘でも悪い嘘でもね。でも、人は反省や後悔もできるし、直そうとする力がある。人はね悪だから良いんだよ。少し難しすぎたかな？まあ、良いよいずれ美雨がこの意味を分かってくれたら〜」  
そっか……。あの時はまだよく分かってなかったけど、こういうことなのか？

「さあ、君の答えを教えてください。」

ライアーは私の変化に気づき、そう問いかけた。

「……いないよ」

「ん？」

「二人共悪いけど悪くない。だから、いない。」

これが私の答え。真っ直ぐライアーの方を見て私ははっきりと答えた。

ライアーは感情が抜け落ちたようにボーっとしてい

る。やがて取り繕うように笑って見せた。

「ははっ、まさかそうくるとはね。良い答えだ。良い目をするようになった。」

「じゃあ！」

「ああ、合格だ。メリーは返すよ。ただし！もう彼女がしゃべることはない。それでも良いのなら……。」

「勿論！」

何となく分かってた。メリーがいつかしゃべれなくなる。それでも、私にできた初めての友達だから、一緒にいたい。それに辛い時、メリーが優しく慰めてくれた時のことを思い出して頑張ろうと思える。

「さあ、別れの時間だ。気を付けてお帰り。」

「うん、ありがとう。」

短い間だったけどここに来て心が軽くなったような気がする。少しは変わった、のかな？

そんなことを思いながら、私は光の先へ向かって歩きだした。これからの未来と自分自身を信じて……。

「どうしてあんな嘘を？」

「さあ、何のことだか。」

「……あなたは何も変わってないね。」

「それ、嫌みかい？メリーさん？」

「そっちこそ嫌みっぽいけど……。」

「世界にはさ、知らなくて良いことだってあるってことさ。少なくとも彼女には必要ない。事故に遭った女の子がわざと車にぶつかって残った女の子を苦しめようとしたなんてどうでもいいだろう？」

「相変わらず分からない人ですね。良い人なのか悪い人なのか。」

「おや、忘れたのかい？僕は라이어。嘘つきだからね。勿論、悪人さ。」

「そう、ですか。」

「さあ、契約はここで終いだ。君も早く帰るといい。大切な妹さんが待っているだろう？……ああ、それと代償は後で貰いに行くから、覚悟しておくように。」

## 雄大と天狗の子

大船渡高校三年 出羽 海春

「雄大、何だよそれ。拾ったのか？」

友達が俺の単語帳に挟んであった羽を指差していた。黒い小さな羽は俺が葉の代わりにしている物で、手のひらに納まるほど小さな物だ。

「拾ったんじゃねえよ。俺の大事な物なんだ」

友達はふーん、とつまらなそうに言っただけの友達に所に行ってしまった。

これをもたらしたのは、ある夏休みの日だった。部活は休みだったが、日課の朝のランニングは欠かさない。午前五時。外はまだ薄暗い。半袖では少し肌寒いが、これから走ることを考えればこの格好でも良いだろう。

家から国道の四十五号線までは緩やかな下り坂が続いている。下り坂だからとペースを上げすぎないように気を付けながら、俺は走り始めた。朝の清々しい空気の中、住宅街の道は車通りもほとんどない。しかし茶屋前の交差点まで来るとさすがにそうではなかった。それを横目に見ながら商人橋の方へと方向を代える。着物の北裳を通り過ぎ、しばらく走ると太いしめ縄のかけられた石造りの鳥居が見えてくる。加茂神社の鳥居だ。

肩で息をしながら階段を上がる。辺りは少しずつ蝉が鳴き始めていた。一番上に着き、振り返ると大船渡の駅前までが一望できた。新しい本屋や建物がやっと建ち始め、何もなかった時から見れば、だいぶ街らしくなってきたと思う。

「お参りして帰ろ……」

砂利の敷地を通り抜け、本殿にお参りを済ませ、もと来た道を帰ろうとしたときだった。

ザアアアッ！

突風が青く茂ったばかりの葉を巻き上げながら吹き抜けた。家から出て来たときはほとんど無風だったのに変だな、とは思ったがそれも一瞬の事で、すぐに俺の頭の中は今日の朝飯のことでいっぱいになった。階段に向おうと二三歩歩き出したときだった。

「うおおああああ！」

どこからともなく小さい子のもと思しき叫び声が聞こえてきた。しかも近づいてきている。

「え！？な、何だ！」

そう言っただけで辺りを見回しても、小さい子の姿なんてどこにもない。しかし、声はどんどん近づいてくる。ぱつ、と上を見上げたとき彼と俺は目が合った。

ゴンッ

鈍い音を立てて額どうしがぶつかった。閉じた目の中で火花が散り、尻餅についてそのまま砂利の上を転げ回った。

「痛ってえ……な、何が起きて……」

そこまで言っただけで体を起こしたとき、俺は息を飲んだ。目の前で俺と同じように額を押さえながら転げ回っていたのは、俺よりも小さな男の子だった。しかし、彼の姿は俺の知っている人間のそれではなかった。

何時ぞやテレビで見た山伏の格好を彼はしていた。それだけならばまだしも、彼の背中にあったのは、黒い翼だった。しかも、彼が左右に転げまわるに連動するようにバタバタと羽ばたいている。

「うう、痛いんじゃないか……」

彼がひとしきり転げまわり、落ち着くまでの間、俺はじっと彼のことを見つめていた。いや観察していたと言った方が正しいかもしれない。

「本当はもっとかつこよく登場するはずが、何たる失態……」

「き、君はいつたい？」

額を押さえながらぶつぶつ呟いていたが、俺が見ていることに気が付いたのかあわてて立ち上がった。

「わ、わしは烏丸！由緒正しき天狗の子！おぬしに聞きたいことがあって参上したのじゃ」

烏丸、と名乗った男の子は腕組みをしてこちらをじっと見ている。俺のみぞおち辺りまでの身長。見た目は小学生ぐらいだ。

「天狗の子って……おいおい、高校生をからかうんじゃないよ」

そう言っただけで俺は立ち上がった烏丸の額を突いた。

「からかってなどおらん！さては、おぬし信用しておらんか？」

そりゃ、突然振ってきた男の子が自分のことを天狗だ！などと言うのを、言った側から信じろという方が無理である。

「ぐぬぬ……なら、これでどうじゃ！」

そう言っただけで烏丸はジャンプするように膝を曲げた。一瞬、跳びかかれるのではないかと身構え目を閉じたが、予想した衝撃は伝わってこなかった。

「これでも、おぬしはわしを信用しないのじゃな？」  
恐る恐る目を開けた。しかし、先ほどまで烏丸が立っていたところには誰もいなかった。まるでキツネにつままれたような気持ちで俺は辺りを見渡した。

「たわけ、上じゃ上」

声がした俺の頭上のほうを見ると、背中の黒い羽を羽ばたかせながら地上五メートル程の所にいた。

「と、飛んでる……」

「当たり前じゃ、天狗だからの」

そう言っただけで烏丸は再び俺の前に降り立った。どうだ思い知ったか、と言わんばかりに胸を反らせている。驚きを隠せずに、俺はポカンと口が開いたままであった。

「父上は修行の一環でいろいろ忙しいのじゃ。わしはわしの知りたいことがあっての、それで誰か来るのを待ってあったのじゃ」

「誰かって……こんな朝早くに？」

烏丸はまっすぐに俺の事を見つめて言った。

「そうじゃ。夕暮れになったら、父上と共に次の土地へ行かねばならんのじゃ。だから、朝から待ってあったのじゃ」

その目には嘘も誇張もなかった。ただただまっすぐに、何かを知ろうとしているという思いが伝わってきた。

「おぬし、名前は？」

「雄大だ。俺が答えられるなら何でも答えてやるよ」

烏丸は口を開きかけたが、またすぐにつぐんでしまった。そして、何かを考え込むように腕を組んで眉間にしわを寄せている。

「どうしたんだ？今さら考えてんのか？」

「いや、そうではないのじゃが……本当に聞いて良い物なのかと思ってしまったのじゃ」

「何だよ急に、何でも良いから言ってみろよ」

「そうか？それなら、本当に聞いてもよいのだな？」

烏丸は念を押すように俺を見上げ目をじっと見つめてきた。その大きな瞳に俺の姿が映っていた。

「分かったから、言ってみろって」

俺はそう言っただけで烏丸の頭に手をのせた。

「震災の、ことなんじゃ」

なんとなく予想はしていた。烏丸の手を引きながら俺はそう思った。先ほど駆け上がったてきた階段の一番上に腰かけ、俺は再び町を見やった。

「どうして震災のことが知りたいんだ？」

烏丸はこくんと頷いて話し出した。

「六年前、わしは今より小さかったのじゃ。わしの住んでいるお山も物凄く揺れて、あちこちが崩れたりしたのじゃ。そして、山の動物達がうわさしていたのじゃ」

「うわさ？」

「海のそばは無くなってしまったに違いない。仲間がたくさん死んでしまっただろう……と。なあ雄大。あの日、この町には何が起こったのじゃ？誰もわしには教えてくれなかった。父上も自分の力で聞くのも修行と言っていた。だから、雄大が良ければ教えてほしいのじゃ」

烏丸の瞳には涙が浮かんていた。きつと、ドキドキしているに違いない。今から自分の知るものが、恐ろしい物かもしれないしそうでないかもしれない。どちらにせよ、今、烏丸は未知の世界に触れようとしている。

「わかった。教えられそうところは教えてやる。今から言うのは、烏丸にはまだ分からないことも怖いから」

もしれないこともあるけど大丈夫か？」

烏丸は静かに頷いた。

——そう、これは俺が小学校の話。

「あの日、ここから少し南の方の海で大きな大きな地震が起きたんだ。そして大きな真っ黒い津波がここを襲ったんだ。」

「津波？真っ黒な……」

烏丸は咬んで含むように繰り返した。

「ここだけじゃない。海に面してる多くの街がそうして津波に襲われて、ほとんどのものが壊れたり無くなったり使えなくなったりしたんだ。そして、人もたくさん死んでしまったんだ」

「たくさん……」

烏丸は真剣にこちらを見つめている。その瞳には怖がる様子は無かった。

「中には目の前で大事な人が死んでしまった人もいるんだ。ほんの少し避難するところが違っただけで生きるか死ぬかを分けてしまったんだ」

そこまでざっくり震災について話し終えると、烏丸はすっと立ち上がった。静かに街のほうを見つめている。短い髪が風に揺られていた。

「じゃあ、こうしてわしが雄大と出会えたのも奇跡みたいじゃない！」

そう言って烏丸は嬉しそうに羽を揺らしていた。

「雄大は今はまだ作りかけじゃがこの街はどうなっていけばいいと思うのじゃ？」

「俺が？」

俺は少しの間考えて言った。

「優しい街になればいいと思うんだ。烏丸みたいに震災のことを知りたいって言ってくれた人にもそうでない人にも」

俺がそこまで言うとう丸丸はニッと笑った。小さな白い歯が、朝の日を浴びてキラキラしている。

「ありがとうなのじゃ！雄大のおかげでたくさんのが知れたのじゃ」

「もういいのか？」

烏丸はこくんと頷いた。

「じゃあ、わしは父上のところに行くようだからもう行くのじゃ。」

そう言って烏丸は階段とは逆の本殿のほうに歩き始めた。

「烏丸！」

呼び止めると烏丸は笑顔で振り返った。

「また……また来いよ。この街が、もつときれいにな

ったときに」

烏丸は待つてましたと言わんばかりに、顔をくしゃくしゃにして笑った。

「ありがとうなのじゃ！きつとまた遊びに来るのじゃ。そして、この街はきつときれいな街になるのじゃ！」

ザアアアアツ……

そこまで烏丸が言うと、先ほど吹いた突風が再び吹きぬけた。帰ろうと振り返った時、そつと俺の肩に何かが触れた。

それは烏丸の物と思われる黒い小さな羽だった。

## 《一般部門》

アワビのしあわせ

小松 則也

むかし、むかしのお話です。アワビに悪い病気がはやり、たくさんさんのアワビが死にました。ヨシの母も亡くなり、アワビのなかまは、ヨシたった一人になってしまいました。

そのようなわけで、アワビの仲間は、ヨシたった一

人になってしまったのです。

ヨシは、その後、イカのおばさんに引きとられ、それは美しい二枚貝になりました。そして、だれにでもやさしく親切でした。あるとき、エビのおばあさんが、向こう岸にわたろうとしていました。

「おうい、コンブ。ちょっと橋を作ってくれない。エビのおばあさんが、そっちの岸までわたりたいんだつて」

美しいヨシにたのまれ、

「いいよ。わたしは、一日中波にゆられて、ぶらぶらしているだけだから、たやすいごようさ」

そう言うって、コンブはよろこんで橋になってくれました。

「はいどうぞ」

ヨシもコンブの間にはいつて橋になり、エビのおばあさんを向こう岸まで渡してあげました。エビのおばあさんは、体をまんまるにしてふかぶかとおじぎをしました。

また、あるとき、カニの子どもが、まいごになっていました。

「おうちにかえれなくなってしまったよ。えーん、えーん」

「そうか、そうか。カニのぼうや。ほら、わたしのせなかにおのり！家までおくっていつてあげるよ」

そう言うのと、ヨシはカニの子どもを背中のにのせ、スイスイとおよぎだしました。

七色にキラキラとかがやき甘いかおりを放つアワビのヨシには、じつは、ひみつがあつたのです。ヨシは、一日のうち少しの時間しか起きていることができなかったのです。ヨシの七色にかがやく美しさは、一日のほとんどもを眠っているからできることだったのです。アワビのヨシに会える時間は少ないので、起きているヨシのまわりには、海の生き物たちがいつもあつまっていました。

「きょうの、わたしのドレスどう？にあう？」

ヨシがききました。

「きょうのおめしものは、また、とくべつうつくしいね」

ナマコがへんじをしました。

「なあ、ヨシ。ぼくは、自分の家をつくったんだ。ぼくの家に遊びにこないか」

若い大工のトスルが言いました。トスルは、まじめで海一番のはたらきものでした。また、トスルのつくる家は、じょうぶで住み心地がよいと海中のひょうばんでした。そんなトスルのおさそいでしたが、

「ごめん、トスル。わたし、その日、サンマとよくそくがあるの。だから、またこんどね」

ヨシがすまなそうにこわりました。

ヨシは、サンマといっしょにとりの海にでかけ、せまい岩の間をくぐったりめずらしいイソギンチャクを見物したりして、みじかい時間を楽しみました。お年ごろになったヨシは、サンマやサバのように光る魚がお気に入りでした。

一方、トスルは、地震でもあつたときにみんなが困らないように、ひまさえあればせつせとはたらき“あんしん避難所”を作っていました。

“あんしん避難所”がもうすぐ完成するというときでした。たいへんなことが起きたのです。とおくで海底火山が爆発したのです。爆発のえいきようで、潮のながれが急に速くなり、生き物たちがながれそうになりました。

「ナマコ。ヒトデ。早く、早く。こっちの避難所へ、逃げろ！」

岩かげからトスルが大声でさけびました。危機一髪、海の生き物たちは“あんしん避難所”へにげこみしました。足の速いサンマやサバたちは、一目散にとおくへにげてゆきました。



「それにしても。大きな、ばくはつだったな」  
トスルが言いました。

「まず、みんな無事でよかった。みんな、いるか。名前をよぶので返事をしてください」

タコのたいちようが言いました。

「トスルはいるな。ナマコ（はい）、ホヤ（はい）、ホタテ（はい）、ウニ（はい）、ヘラガニ（はい）、アワビのヨシ、ヨシ！」

「アワビのヨシがいないぞ！」

「ヨシがいない！」

「そりゃあ、たいへんだ。さあ、みんなで、手分けしてさがしにいぐぞ」

タコのたいちようが大きな声を上げました。

「いたぞ。ヨシがいたぞ。岩の下じきになってる！」  
ホタテがヨシを見つけました。

「おうい、だいじょうぶか」

「ウーン」

ヨシはいまにも消えそうな小さな声でへんじをしました。  
「さあ、たすけるぞ。この岩をうごかすんだ。さあ、コンブを岩にまきつけろ！」

タコのたいちようが指示をだしました。

「そうれ、そうれ！」

みんなで、力いっぱいコンブをひっぱりました。大きな岩が少しだけうごきました。

「そうれ、そうれ、そうれ、そうれ！」

大きな岩が、やっとゴロン・ゴロンとうごきました。

こうして、アワビのヨシは、無事救出されました。しかし、ヨシはけがをしていました。アワビの美しい貝がらが割れてしまったのです。ヨシは、あんしん避難所に入院し、すぐにきずの手当てを受けました。たくさんの海の生き物たちがヨシを心配してお見舞いにくてくれました。

それから、3日目の朝のことでした。海の水が急ににごってきたのです。海底火山の爆発によって、大量に出た火山灰がながれてきたのです。やがて、その日のうちに、あんしん避難所のまわりの海は、まっ暗になってしまいました。ヨシのまわりだけが少し明るく見えました。

暗い海のままで一週間がすぎました。もう食べるものがありません。生き物たちは、だんだんやせ細ってゆきました。

「いつまでも、こんな暗いままだったら。わたしたちは、もう生きられないわ。エサのコンブもなくなっ

しまったわ」ウニが泣き出しそうな声で言いました。  
「オレたちのごはんは・・・水の中にも砂の中にも、もうどこにもいない！」

やせ細ったナマコがいきました。

「海がもとのように、明るくなってくれればいいんだがな」

タコのたいちょうが言うと

「私に、まがせてください！私が太陽になります！」

アワビのヨシが言いました。

「えっ、ヨシが太陽になるって。何を言ってるんだ。だいたい、きみは、まだけがなおってないじゃないか」

トスルが言いました。

「でも、私、みんなに助けてもらったし、みんなのために太陽になって、この海をもとにもどしたいの！」  
ヨシは、しんけんでした。

「わかった。だったら、僕も君の手つだいをするよ！」  
トスルもまた本気でした。

その日の夜、トスルは小さな体で大きなアワビを背負うと、高い高い岩の上にのぼってゆきました。そして、しっかりとヨシのからだをささえました。

次の朝、いつもと同じように太陽がのぼりました。

すると、よごれた海の水は、みるみるうちにきれいな海へと変わってゆきました。昨日まで暗かった海がパアーツと明るくなったのです。十日ぶりの明るい日の光です。

「やったぞ。やったぞ。もとの明るい海にもどったぞ」  
海の生きものたちは、大いに喜びました。その海のけしきは、七色にかがやき、これまでにないくらい美しいさでした。

それもそのはず、その太陽は、アワビのヨシがはなつた命のかがやきだったのです。ヨシは、お母さんがさいごに話した“あなたは、多くの人達を幸せにできる子なのよ”という言葉葉を思い出していました。

アワビのヨシが光といっしょに出す熱は、やけどをおうくらい高いものだったので、その熱を長い時間うけたトスルは、全身にやけどをおってしまいました。命のかがやきは、その後だんだんと消えてゆきました。

黒くなったヨシとトスルの体から出たあわが上へ上へとのぼってゆきました。そして、二人は、もう二度とうごくことはありませんでした。

「二人とも、こんな姿になってしまつてよ」

タコのたいちょうは、泣きながらアワビとトスルに手を合わせました。そして、二人をつれてかえり、一つ

のお墓に入れました。

「大すぎだったよ。よし！」

「ヨシのドレス、すてきだったよ！」

「ヨシとトスル、ほんとうにありがとう」

海の生き物たちは、口々にお別れを言いました。

あれから、一年がたちました。海の中は、大しけで  
あれることはあるものの、もとのような静かな海にも  
どりました。タコのだいちょうと海の生きものたちが、  
ヨシとトスルのおはかまいりに行きました。すると、  
どうしたことでしょう。おはかの周りが光っていたの  
です。

「あら、まあ、おはかが光ってる」

「ほんとだ」

「どうして」

ふしぎに思い、ぼんやりと光る土をほってみました。  
すると、七色にかがやく一つの貝の中でアワビとトス  
ルが寄り添うようにねむっていたのです。まるで、今、  
生まれたかのように。これが、アワビのはじまりです。

なぞのかまもちばあさん

木川田 恵理子

第三図書館はコンクリートで出来た基地のようだ。  
自動ドアを通って中に入ると、ひんやりとして少しカ  
ビ臭い気がした。

第三図書館には、大船渡市に関する過去の資料が保  
管されている。僕がここに来たのは、夏休みの自由研  
究をするためだ。僕とコータは歴史部に入っている。  
以前大船渡市の昔の文化を調べた時に、食いしんぼう  
のコータが「かまもち」という郷土料理に目をつけた。  
それで自由研究として「かまもち」を再現してみるこ  
とにしたのだ。ここには、資料庫のほかに、会議室や  
調理室も備えられている。僕らが自由研究をするのに  
ちょうどいい。料理なんて家庭科の授業でしかやった  
ことはないけれど、かまもち作りの動画を何回も見て、  
予習をしたから何とかなるだろう。

「しゅん、遅いよ。」

調理室にはコータが先に来っていて、もう準備を始め  
ていた。僕はカバンからノートを取り出し、かまもち  
のレシピが書いてあるページを開いた。

まずは『お湯を沸かす』か。

僕は食器棚から大きな鍋とやかんを取ってきて、水

を入れ、IH調理器にのせてボタンを押した。コータは黒砂糖と味噌とくるみを混ぜている。小麦粉も既に計り終えてボウルに入れられている。僕は、お湯が沸くまで、壁に備え付けられているテレビでかまもち名人の動画を見ることにした。

手ぬぐいをかぶった女の人が、小麦粉に湯気の上がお湯を注ぎ、素早く箸で混ぜたあと、手で力強くこねていく。熱そうだが大丈夫なのだろうか。こねながら説明している。

「よぐよぐこねる。昔はここにご飯を入れて作ったりもしたもんだ。」

やかんのお湯が沸いたので、僕は加熱を止めた。鍋からも湯気が上がり始めている。

「先に塩をいれておこうぜ。」

コータが塩のビンの赤い蓋を外し、鍋の上で逆さにして振ろうとした瞬間、

「ああっ！」

内蓋が取れ、塩がどぼと全部鍋に入ってしまった。

その途端に湯がぶわっと沸き立って、僕もコータも慌てて鍋から離れる。安全機能が働いて、加熱は自動的に止まった。

「このあかばかがー！」

「はあっ？」

怒鳴り声のした方を見ると、信じられないが、テレビの枠にごつごつした指がかかっている。見る間に右足、左足が出て、白い布をかぶった頭が見えたと思ったらどさっと落ちた。

「あいでででえ。」

腰をさすっているのは、白いエプロンを着た、手足のひよろ長いあさんだ。床に手について立ち上がったが、腰が曲がっているせいで顔が見えない。

「まったく、おめえだちさっぱだめなもの。見でらんねえ。」

そう言いながら膝に手を当てて、ずんずん僕らの方に近づいてくる。僕らは驚きで声も出ない。流しで手を洗うと、ようやく顔を上げた。やせた顔に、目がぎょろりと光っている。

「かまもちの作り方、教えてやっから。」

ばあさんはそう言うのと、さつきコータが作った黒砂糖味噌を勝手につまんで食べる。

「ああ、これはいい出来だ。」

次に鍋の湯をスプーンですくって飲み、いくらか湯を捨てて水を足し、台に戻した。と思ったら、きよろきよろ周りを見回している。

「ガス台はどこだ！」

「ガ、ガス台って何？」

コータが聞き返した。

「さっき湯沸かしてたべ。どこで火にかけてたんだ。」

「ええと、火じやなくて、ここにのせてボタンを押すと熱が出るんです。」

「火も出ねえのに湯が沸ぐのが？」

「いったいこのばあさんは何なんだ？コータはばあさんににらまれながら加熱ボタンを押し、困り顔で僕を見た。」

「あのー、おばあさんは誰ですか。どうやって来たんですか。」

僕は恐る恐る尋ねた。

「おらはエツだ。ここさどうやって来たかはわかんねえ。テレビ付けたらおめえだち映ってたのは覚えてっけどな。」

「テレビ？」

僕は思わずテレビの方を見る。動画を映していたはずの画面は真っ暗。もちろん液晶画面は割れていない。

「ほれ、話は後だ。まずはかまもち作っぺ。」

エツばあさんは僕らを促し、かまもちを作り始めた。

小麦粉に沸かしたての湯を注いで箸でかき回し、さらに背中を丸めながらあつという間に大きな団子をこね上げた。

「沸かしたての湯でこねれば、時間がたってもかまも

ちが硬くなんねえの。ただやけどはすんなよ。湯の量を加減して耳たぶくらいの堅さにすんだ。」

大きな団子をちぎって、さらに小さい団子に分けていく。

「ほれ、おめえだちもやってみる。」

僕はエツばあさんに教わりながら、暖かい団子を平たくのばし、真ん中に黒砂糖味噌をのせてから半分に折り、中身が漏れないように端をつまんで閉じた。エツばあさんの手はするする動き、いとも簡単にかまもちを作り上げる。

「おもしろえ。」

コータはすぐにコツをつかんだようだが、僕の方は中身がにじんで出て来てしまい、エツばあさんに何度かなおしてもらった。

全て包み終えたら、あとは茹でるだけだ。エツばあさんは出来上がったばかりの半月を次々と鍋の中に入れていく。

「早く食いて〜。」

「煮えたら浮いてくつから、そしたら上げんだぞ。」

エツばあさんは調理台の引き出しを探り、長い柄のついた網みたいな道具を取り出した。僕はエツばあさんに言われて、棚から大きな皿を出して持って行く。そこに、エツばあさんはぷかぷか浮いてきたかまもち

を網ですくって入れてくれた。

「少し冷めたら食べっぺし。」

エツばあさんが洗い物をしている間、僕は少しでも早く食べようと、かまもちをノートであおいで冷ました。茹でたてのかまもちの表面はつやつや光り、少しでこぼこだ。

「そろそろいい？」

コータはかまもちに手を伸ばしている。

「ああ、まあいいんでねえが。」

やった！かまもちを手取る。ちょっと熱くて、ずっしり重い。僕はそっとかじる。

「んんっ！」

かまもちにかぶりついたコータは、中からあふれ出した黒い汁をこぼしながら慌てている。

「急いで食うからだ。どうだ、うんめえべ。」

口をもぐもぐさせながらうなずくと、エツばあさんは満足そうに笑った。

砂糖で手をべたべたにしながら、かまもちを夢中で食べた。残り三つになったところで、写真を撮り忘れていたことを思い出した。僕は手を洗おうとし、はつとした。

エツばあさんがいない。

洗って拭いた鍋とボウルだけが残っていた。

調理中の写真を撮るために、僕はもう一度かまもちを作った。けれど、エツばあさんに教えられた通りに作ったのに、なぜかあのかまもちにならなかった。夏休みが終わり、宿題を提出した後も、エツばあさんのかまもちを食べたくて、僕は研究を続けた。そして第三図書館に通い資料を調べるうち、偶然にも僕はエツばあさんの正体を知ったのだ。

そう、エツばあさんはあのかまもち名人だったんだ。だけど、あの日エツばあさんがどうして僕らのところにやってきて、いつの間にかいなくなったのか、そして何よりも、どうすればあの日食べたかまもちを作ることが出来るのかは、なぞのままだ。

くやしなききねん日

川端 美智

さかり川の水は今日も元気にながれている。とおせんぼするコンクリートのかたまりにぶつかっても、たのしそうにとびはねている。

ぼくは、りょう手につりどうぐをかかえて土手のかげ下りました。今日のあさまではたけにいたつやつやのミミズをタッパーからとり出しました。ミミズの頭

から体の半分くらいまで、つりばりに通すようにさしました。

右手にさお、左手につりばりをもつてコンクリートの上に足をのせると、川の水が長ぐつにいきおいよく当たりました。たおれないように、ゆっくりむこうぎしにわたりました。土手であそんでいるオカアとナミちゃんが見えました。

さおをりょう手でにぎりしました。後ろにふり上げてから、前にふり下ろしました。リールが回って、つり糸がとび出してきました。つりばりが川におちて、リールがとまりました。

「にいに、がんばーれ。がんばーれ」

オカアとナミちゃんの声がリズムにのって聞こえてきました。

(うわっ)

十分もしないうちに、うきがびよこんとしずみました。いそいでリールをまきました。足をひらいてふんばりました。いくらまいても魚が見えてこないの、まぐろがつれるときのテレビみたいに、右や左に体をかたむけてひっぱってみました。それでも、ぜんぜんつり上がりませんでした。

(つりばりがどこかにひっかかったのかもしれない)

はじめてそう思いました。

(オカアにたすけてもらおうかな)

と顔を上げたら、

「つれたの！」

ナミちゃんがうれしそうにさけんでいるのが見えました。

(たすけてなんて言えない)

手に何かが当たって、つり糸がリールのわきでもしやもしやにからまっているのがわかりました。細いうめいなつり糸が、たいようにてらされてキラキラ光っていました。

(どうしようもない)

力いっぱいさおをひいて、川にむかってぴんとはったつり糸を切りました。

からまったつり糸をぐしゃつとにぎりしました。コンクリートをわたって、もとのばしょにもどりました。

「マサヤ、からまったの？」

オカアがやさしく声をかけてくれたのに、なぜだかすぐイライラしました。

からまったつり糸の外がわをひっぱってほぐそうとしました。でも、すこしうごいただけですぐにうごかなくなりました。どんどんひっぱったら、よけいにか

らまりました。

「そのままでもいいんだ。今日は帰ろうか」

オカアの声をもた聞いたら、こんどは頭のとっぺんまであつくまりました。

（手でつるからいいもん）

とっさにそう思いつきました。とび出している一本のつり糸をつかんで、おくばにはさみました。あごにぎりぎりと力を入れてかみ切りました。その一本を力いっぱいひっぱりました。二メートルぐらいとび出してきたので、またねもとにかみついてちぎりました。その糸のかたがわに新しいつりばりをつけました。ミミズの頭をまたつきさしました。

うでを前後にふってつりばりを川のまん中あたりにおとそうとしました。でも、すぐそばで草にひっかかりました。

こんどは川のぎりぎり近くまで行って、草の頭をこえるようにうでをちぢめてつりばりをなげました。川の中にはおちたけれど、すぐに川のはしにおしながされてしまいました。もう一どなげたら、またおしながされて、水草にからまりました。

「オカア来て。オカア来てよお」

ぼくはとうとう土手にいるオカアの方をふりむきました。なみだがふき出しました。

オカアがしずかに近づいてきて、ぼくの頭をりょう手でつつみました。ぼくはオカアのおなかに頭をおし当てました。ナミちゃんが近くにくるのがわかりました。

（はずかしいな）

でも、なみだはぜんぜんとまりませんでした。

「オカア、もう帰ろう。だめだった」

すこしして、ぼくはオカアを見上げてつぶやきました。はな水となみだを टीーシャツ のえりでぬぐいました。そのとき、オカアが言いました。

「マサヤ、今日のマサヤ、かつこよかったね」

（何を言ってるんだらう。ふざけてるのかな）

でも、オカアはめずらしくまじめな顔でした。

「うまくいなくてイライラしたとき、すぐにあきらめないで何とかしてやろうってがんばってた。それってすごかつこいいことだと思っただよ。それでもダメでなくのは、ぜんぜんはずかしいことじゃない。かつこいいなみだだと思っただよ。今日のマサヤ、ものすごかつこよかった。オカア、ものすごかつこよかった」

オカアは目を赤くして、本当にうれしそうでした。ナミちゃんがシロツメクサのかんむりをりょう手に



もって、近づいてきました。

「よくがんばりました」

ナミちゃんとオカア、二人でずっと作っていたかむりを、ナミちゃんはぼくの頭にのせてくれました。ぼくはナミちゃんにだきつきました。

(ありがとう。こんどはぜったいつるからね)

## サンマの月見

木下 淳

大船渡市のある深い森の中には、青々と緑が絡まりもつれ合って出来た場所があった。

森は怖いほど静かで、光すら通さない暗闇が沈殿していた。そこには、とりわけ小さな池があり、雑草なども生えていた。その中にその生き物は住んでいた。しっぽを少しケガしており、銀ピカの体を細めてうずくまり気も遠くなるような時間を独りで過ごしてきた。

そいつは「何者だ。」

乱暴者のサンマは一昔前にひどい悪さを繰り返したため、今はこの森の奥に閉じ込められがちになってしまっているのだ。そんな事を覚えている生き物なんてもうほとんどいなくなってしまうけれど・・・。

サンマはいらいらしていた。死ぬほど退屈で仕方な

い。一体俺は、いつまでこうしていらいいのだろう。

もう嫌だ。暴れまわりたい。

ケガを早く治して泳ぎまわりたい気持ちにはあったが、中々思うように体は動いてくれない。サンマはますますいらいらしていった。

退屈しのぎに頭を縦横に思いっきり振った。体を動かしたり、次は恐ろしい形相の特訓。最後のとおておきに水をぶるぶると振動させる自慢のしゃがれ声で「キューッ」とする吼え声を辺りに轟かせる。でも全てはすぐに元通り。森はやはり真つ暗で静かで何も起こらない。サンマは遂に疲れ果てぐつぐつと眠りこんでしまった。

それからどれ位の時間が経ったのだろう。サンマは目を覚ました。ぼおとした頭で周囲を見回すが、特に変化は見当たらない。

それもそうだ俺は、何を期待してたんだ。

サンマは「キューッ」と叫び上を見上げた。光など全く通さない黒い水面。しかし、そこにサンマは普段との違いを見つけた。あの漆黒の水面にほんのかすかではあるが光が見える。今にも消え入りそうだけど確かにそれはあった。

サンマは、食い入るようにそれを見つめた。ふつふつとある強い思いが体の底から湧き上がってくる。あ

れをなぜか欲しいと思った。あれを僕のものにしたい。そう思うと後は早かった。サンマは、ケガを早く治す努力を少しづつ始めた。そして、自由になった体を力いっぱい動かし光のある方へと泳ぎだした。あの光を手に入れたくてひたすらに必死なのだ。

サンマは、真つ暗闇の森の水面を突き抜け深く濁った群青の世界に入った。針の穴ほどに小さかった光はいつの間にか大きく広がって帯状になり、辺りをぼんやりと明るくしていた。もっとずっと遠くあの光の根源はあるのだな。サンマは生意を決してフツフツと音を立てて上へと昇っていく。

光は絶え間なく水中世界に降り注ぎゆらり揺れる透け布のように翻つてはきらきらの粒子をばらまいている。

サンマは一層全身に力をこめて水を掻いた。

「ぼっしゅん」。サンマは水中から外の世界へ飛び出した。

それは月だった。異常な程大きい真ん丸い形をした青白く燃える月。それが水中に光を降らせていたのだ。

サンマは月を見上げながら水の中から陸地へと辿り着いた。

サンマは、ドクドクと鳴らすそのありさまは何とも惨めだ。

近くで見ていたカラスがサンマの物音で目を覚まし驚

いて逃げ出した。サンマはカラスに目もくれず池の傍にしゃがみ込んで月を見つめた。

心臓が口から飛び出しそうなほど激しく高鳴っているのを感じた。

俺はあの空の上のでっかいのを手に入れようとしているのか・・。いいぞ。すごいぞ俺。

あれを手に入れたらボールみたいに蹴ったり転がしたりして遊ぼう。それで皆に見せびらかしてやるんだ。きっと皆驚いて俺に寄ってくるんだろなあ。

何よりあれを自分のものにしたらずーっといい気持ちでいられそうだ。あんなにきれいなんだから。

でも気になることがあった。

どうしたら月を手に入れられるだろう。

サンマは、空を飛べない。池の中は自由に歩けてもどろろしたって水中の生き物だ。掴もうとしてみてもただ地響が鳴り渡るのみ。そんなサンマに月を手に入れるアイディアなど思い浮かぶはずもない。認めたくない現実にはサンマは困惑した。しかしそれでも諦めたくはなかった。サンマはどうしてもあの光輝くものが欲しいのだ。

サンマは月に向かってそっと体全体を伸ばしてみた。今にも触れられそうな気がするのに全然届かない。その事実にはサンマは愕然とした。

草は風にサラサラ揺れて木々はひそやかにざわめきだす。サンマは初めてそれに気付いたかのようにゆつくりと辺りを見回した。

ああそうかとサンマは思った。皆おれと同じであいつが大好きで欲しくてしょうがないのにどんなに体を伸ばして背伸びしても捕える事など出来ないのだ。

皆おれと同じなのだ。体全体が乾いてきているのをサンマは感じた。切ないのだから悲しいのだから解らない心持ちだ。この初めての不思議な感情をサンマはどうすればいいか解らずにもてあましていた。月はそんなサンマを知ってか知らずか青白く透き通る光線を世界に放射していた。

サンマはそこで「はっ」とさせられた。森で過ごす内にサンマは次第に存在すらも忘れ去られてしまっていた。とうとうサンマの気持ちに皆に感じることはなかったのだ。

誰も居ない暗闇の中サンマの孤独は嫌がおうにも増すばかり・・・。

サンマは体を震わせ大声で泣き叫び月に訴えた。

「キューッ」、「キューッ」俺には何も手に入らない。月はあたたかい場所だ。欲しくて欲しくてたまらない。気持ちは消えないのに。なのに俺は奪う事も出来ない。そんなに勇気は無いんだ。だって俺にとって全てが大

切な事に変わりはないのだから・・・。結局何も掴めずに醜く嫉妬して焦がれるより他ないんだよ・・・どうして俺は俺でしかないんだ？

こんなのあんまりじゃないか。なあ月よ真剣に答えてくれないか？

ぼろりぼろりと涙は流れ続けていつのまにかサンマの足元には大きな海が広がっており、大量のサンマが、大船渡市に戻ってくるようになっていった。

夜明けが着々と進み、月だけが全ての成りゆきを見届けていた。

## 第 27 回

ふるさと・おおふなとお話大賞審査委員

委員長 石 山 宣 昭

委 員 村 上 修

委 員 雫 石 敏 子

委 員 奥 田 昌 夫

## 第 27 回

ふるさと・おおふなとお話大賞作品集

発 行 日 平成 30 年 1 月 18 日

編集・発行 大船渡市立中央公民館

〒022-0003

大船渡市盛町字内ノ目 4 番地 2

TEL 0192-26-3166

FAX 0192-26-5903

